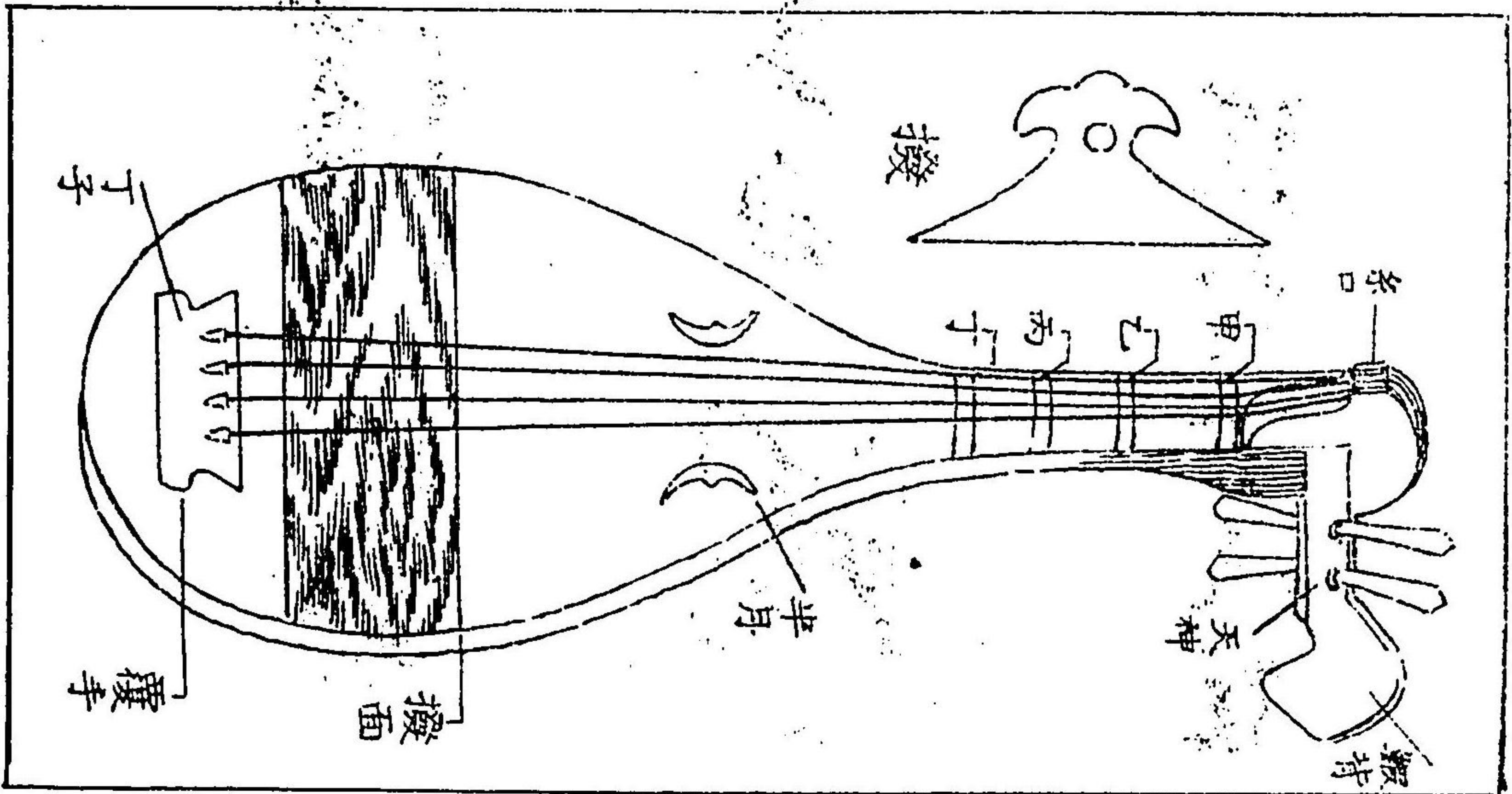


從二位清經

清經

明治
39 11 5
肉交



新撰 薩摩琵琶歌 第二集

目次

辨内侍……………一

吉野落(初段)……………六

吉野落(二段)……………九

特 66 三
332 吉野落(二段)……………一四

吉野落(三段)……………一六

扇の的(初段)……………一九

扇の的(二段)……………二三

四條暁(初段)……………二七

四條暁(二段)……………二九

四條暁(三段)……………三〇

俊寛(初段)……………三二

俊寛(二段)……………三三

阿新丸(初段)……………三六

阿新丸(二段)……………三九

阿新丸(三段)……………四
 阿新丸(四段)……………四
 楠公(初段)……………四
 楠公(二段)……………五
 島原合戦(初段)……………五
 島原合戦(二段)……………六
 島原合戦(三段)……………七
 木崎原合戦(初段)……………八
 木崎原合戦(二段)……………九
 木崎原合戦(三段)……………一〇
 鎌倉の宮(初段)……………一〇
 鎌倉の宮(二段)……………一〇
 同窓會……………一一
 兵六物語……………一二
 仁川海戦……………一三
 旅順口……………一三

常陸丸……………一五
 新田義貞(初段)……………一六
 新田義貞(二段)……………一六
 閉塞決死隊……………一七
 廣瀬中佐……………一七
 鴨綠江……………一七
 南山の役(初段)……………一八
 南山の役(二段)……………一八
 赤壁……………一九
 千早振……………一九
 送別……………二〇
 灘廻り……………二〇
 四方山……………二一
 大和魂……………二一
 若木の花……………二二
 忠度……………二二

月照……………一五七
 菅公……………一六〇
 小楠公……………一六三
 國の御柱……………一六五
 月花……………一六七
 澁河……………一六九
 王政復古……………一七三

新藤摩琵琶歌 第二集

寺尾 彭措

辨内侍

あはれや落花情あるを流水などか情なけ
 む況や中もよし野河にまよいて世にすむ妹
 山や、脊山のみねの月としも、しばしい
 さよふ程もなく、あかぬ別れの村時雨、
 曇りやすきぞ是非もなき、茲に河内守左
 衛門尉、楠正行は、天下の安危を身一つ
 に、思ひ集めてみよし野や、吉野の宮に
 召され行、頃は正平二年、しはすの末の
 冬の空、嵐にきはふ木の葉にも、霰たは
 じる玉笹の、消えを争ふ、一族郎黨引具
 して、急ぎぞ來つる石川や、何騒ぐらん

群千鳥鳴音亂る、彼所より俄かに響く
 人馬の矢叫び敵か味方か伏せ勢か風に嘶
 く駒とめて山下道を見渡せば電光石火切
 り結び落花狼藉泣叫ぶ少女の聲の魂消は
 必定曲者出たりないでや弱を助やり強を
 くじきくれんずと(崩し)馬上の正行最先
 に刃をかざして切て入る前より切つ後よ
 り突貫つ無二無三當るを拂ひ逃るを追ひ
 縦横無盡に薙立し掣電飛雷の早業の其勢
 はさながらに阿修羅王の荒れたるが如く
 獸王獅子の狂るへるに似たり(吟替)野分
 の中の女郎花おもはぬ人に救はれて思ふ
 人とはなりにける其正行に守護されて吉
 野の宮に歸りゆく辨内侍の綾の袖濡る、
 は露か露ならず悲喜交々の涙なり侍臣
 帝に奏すらく逆賊高師直兼てしもおもひ

を掛し辨内侍を奪ひとらん企みして既に
 石川の邊にて軍卒あまた取り圍み虎口危
 く視えけるをゆくりなくも正行が危難を
 救ひ參らせて事なく歸館せられけり傳奏
 かくと聞き召し帝は御簾をかゝけさせ汝
 正行なかりせばいとも口惜しからましを
 よくこそ助け計ひつれとて内侍を正行に
 賜むと詔りして下されぬ何に思ひけん正
 行は繪言いともかしこみて

とても世にながらふべくもあらぬ身の
 假の契りを如何で結ばむ

と奏してこそは辭しにけれ嗚呼味氣無の
 世の中や身はこれ右少辨俊基が忘れがた
 みの姫小松花の匂ひはなけれども操の色
 は深みどり結び給ひし妹と脊の縁にし
 糸の長かれといのりし甲斐も水の泡消な

ばさえねの心かや時雨につらき松さへも
 清き雪には色かゆる習ひもあるに君はそ
 も只假初の契よといひすてしまゝ御心の
 そこにはふかきゆるあらん問ぬもつらし
 問ふはまたいと耻かしとやしなむかく
 やとばかりとつおひつ辨内侍は心から戀
 路のやみにふみまよひに一度の逢瀬をと
 跡を慕ひて行見しにこはそも如何に正行
 を初め百四十三人の一族郎黨はかゝれと
 てしもなでさりし其黒髪を切りすてゝ如
 意輪塔に奉納し扱正行が矢じりもて塔の
 扉にとめたりし辭世のあとをよみ見れば
 歸らじとかねて思へば梓弓

なき敷にいる名をぞとゞむる

扱は我夫正行君かゝる覺悟のましくて
 假の契を結ばじとさとしましゝかそれと

しも淺澤水のいと淺き女心のはかり兼つ
 れなき君と葛の葉のうらみしとの耻かし
 やこの山寺の法の風今のまよひを吹きか
 へて死なば未來は彼の國の一つ蓮の花の
 上各留半坐乗華臺待我閻浮同行人みじか
 き假の契をば長誠の契とも結びかへたる
 うれしさよ帝の御爲君の爲我が身もかく
 や返しせん

大君に仕へ奉るも今日よりは

心にそむる墨染の袖

誠しあらば心なき空行雲もたゞよはん況
 や正行木石にあらず今や決死の出陣に契
 らぬ妻の眞心を身につまさされて流石にも
 斷腸の思ひやるせなく「不便の者よ健氣
 なる」我妻なれとそゝるにも鎧の袖をぬ
 らしけり鎧の袖を濡しけり

(新)吉野落(初段)

美吉野の花も龍田の紅葉も夜半の嵐に誘はれて仇に散り行く時は又増て哀に思ふなり」爰に二階堂出羽の入道道蘊は元弘三年正月に六万餘騎を従へて大塔の宮の日頃より籠らせ玉ふ大和なる吉野の城にぞ攻め寄する菜摘川の邊より吉野の方を見上れば赤旗白旗錦の旗深山嵐に打靡き雲か花かとあやしまれ麓には敵の大勢隙間なく甲の星を輝かし鎧の袖を連ねしは錦を敷くに異らず峰高ふして道細く山嶮して苔滑かなり幾千万の鋭兵が必死となりて攻むるともたやすく落つ可しとも思ほへず斯る處に同十八日卯の刻より兩陣鬪を啞と擧げ敵攻め上れば攻め下し互に勇氣を振ひつゝ爰の谷かしこの峰

に走せ散りて攻め合ひ開き合ひ射手を揃へて散々に射立たてければ寄せ手の兵は命を知らぬ坂東武者親討れども顧ず主斃れても取合はず屍を乗り越えく七日が間息をも繼かず攻め戦ふ血は草芥を染め屍は路頭に横はる斯る處に寄せ手の案内者岩菊丸は足輕共に下知をなし金峰山の嶮を越え木の根岩角攀ち上り在所在所に火を掛けて鯨波を作つて攻めければ城兵も今は前後の敵を防ぎ兼ね自害する者もあれば猛火の中に走せ入て死するもあり向ふ敵と引組で差違ふもあれば宮に注進する者も有り大手の堀は忽ちに死骸を以て埋めたり」宮は此の由聞召し赤地の錦の直垂に緋威の鎧着て龍頭の甲を召させられ三尺五寸の長刀を小脇に挟み屈

竟の兵共廿餘人前後左右に引給ひ群がる。敵に切て入り砂子を飛ばし烟を立て東西を打拂ひ南北へ追廻はし爰を専途と戦ひ給へば寄手の大勢も「此の二十餘人に切立てられ」木の葉の散る如く四方へ颯と散りにける宮は之より藏王堂の大廣間に悠々と引揚げ給ひて軍兵と最後の御酒宴をば遊さる此の戦に宮の召したる御鎧は七筋の矢に射連貫かれ頬先と二の腕に二ヶ處の突き傷負はせ給へと立たる其の矢も抜かせ玉はず流るゝ血潮も拭はせ給はず敷皮の上に立ち乍ら大盃を三度迄傾け玉へば木寺の相模四尺三寸の太刀先に敵の頭を指し通し宮の御前に畏り「聲高らかに歌ふ様」戈鋌劍戟を降らす事電光の如く盤石岩を飛す事急雨の如しと

雖ども天帝の身には近付かず修羅反て彼が爲めに破らると太刀振かざし舞たるは漢楚の鴻門に楚の項伯と項莊と劍を抜て舞し時樊噲庭に立乍ら幕をかゝげて項王を睨みし勢も斯くやと覺ゆる許りなり

一一 段

去程に村上彦四郎義光は殊にはげしく戦ひて敵に十六筋の矢を射付られ篋中の節や袖づりの節より折れて立たるは枯野に残る玉萩の「風に靡くが如くなり」其矢を抜くに暇なく宮の御前にひれ伏して一ノ木戸は早や破れ今二の木戸にて支ふれど連日の戦に軍兵共も打死し逆も籠城覺束なし敵の四方を圍まぬ中早く落させ給ふべし臣は恐れ多き事ながら召させられたる直垂や御物の具を頂戴し御諱をも犯

し參らせて茲に戰死を仕らんと忠義面に
 あらはれて最と懇に申上ぐれば宮は哀
 に』思召し争でか去る事のあるべきが死
 ならば處をかへずして吉野の山にかんば
 しき名を残さんと宣へば義光聞さもあへ
 ず嗚呼淺間敷仰せかな昔漢の高祖が滎陽
 に圍まれし時紀信高祖の眞似をなし楚を
 欺かんと乞たりしに高祖は是を許したり
 是等の御覺悟あられずして天下の大事
 を能くも思し立れたり早く御物の具を下
 し賜はれと御鎧の上帶を解きまつれば宮
 は實にもと思召けん御鎧も垂直も脱がせ
 賜ひて義光に吟手づから渡し宣ふやう我
 若し生き伸びたらば汝が後生を吊らはん
 又打死なしたらば同じ冥土に伴ふべし是
 今生の別れぞと言葉少なく宣ひて涙なが

らに落させ給ふ」義光もせさくる涙を押
 つゝ木戸の櫓に走せ上り大音揚げて名乗
 る様我れは是れ神武天皇より九十六代の
 孫今の帝の第三の皇子一品兵部卿護良親
 王なり逆臣ばらに惱まされ恨みを泉下
 に報いん爲め」今自害する所なり是を見
 て汝等が身に備へたる武運盡き腹を切
 らん其時の手本にせよと呼ばはりて鎧
 を脱ぎて投げ落し錦の直垂に練貫の二重
 の袖を引きくつろげ兩膚脱いで一刀を左
 の腹にぐつと立て眞一文字に引廻し朱に
 染みたる腸を櫓の板に投付けて大刀先く
 はへうつ伏に伏して果たる義光が「最後
 の様こそ勇ましけれ」敵兵之を見て大塔
 の宮は御自害召されたり御首給はらんと
 云ふ儘に四方の圍を打捨て、櫓の下に馳

集る宮は是と引違ひ天の河へと落させ給ふに敵五百餘騎道を遮りければ義光の一子村上兵衛藏人義隆は父が教へに従ひて一人茲に踏み止まり追くる敵の馬の諸膝難では切りすへ平頭打ては勿落し右に突き左に蹴倒し飛蝶の如く飛び廻り猛虎の如くたけり立ち九折なる細道に敵五百餘騎を引受けて半時許支へしが如何に義隆強の者とは云へ「身鐵石に非ざれば深手の矢疵十餘ヶ所薄手の疵は數知れず」今は是迄とや思ひけん竹村に走入りて腹掻き切「切てどうせにける」此隙に宮は虎の口を遁れ給ひ高野山へ落ち伸び給ひしは村上父子が美吉野の花と散りにし其功を立田の秋の紅葉葉の赤き心に依るとかや

(新)小松の操(初段)

忠孝共に全くし文武を兼ねて身に具へ世の變に遭ひ難に耐へともかくにもあやまらぬ人のためしはむかし今多く得がたき物なるを嵐に雪にをれずして「遂に操をかさりし」小松の内府重盛が世に盡したる心こそ思へばそゝる哀なれ熊野詣での道にして都の變を聞きし時たゆとふ父を勵まして即ち急き走せ參し待賢門の戦に強き敵をも事とせず進み向ひし其勇は平將軍が再生と人の言るも道理なり世の名は平治地は平安我は平家を此の三ツの吉の兆ある此の軍平定無論と軍卒の心勵まし進みしは才智とこそはいふべけれ子息資盛若くして時の攝政基房の參内するに遇へる時下乗せざるを咎めつる前駈の者の暴行を淨海怒りて基房に再び耻を

與へしも重盛深くこれを慚ぢ遂に我子を
いましめて伊勢に遠ざけ逐ひけるは尙朝
廷を尊敬し禮を守れるのみならず父淨海
があやまりを「補ひ得たりと稱すべく」
おごりし平家の所爲にはさらに似すてぞ
殖勝なる」

(新)一段

時は治承の御代の頃西光康頼俊寛等ひむ
がし山の獅ヶ谷深く謀りし會合も思はず
わすれし酒瓶の「口もれ易き世の習ひ」
聞くより淨海いかりだち院の御所まで迫
らんと俄に兵を催せば一族郎等ことく
く思ひくの出で立に物具かため弓箭取
り馬よ旗よとさわざたち走集まれる人び
とは西八條の邸の内椽に居こぼれ庭に立
ち熊手薙鎌とりくひしめきあひてぞ

見えたりける「此時内府重盛は」主馬の
判官盛國が息まき來りて事のさま告るを
さけどおどろかず静かに直衣取りよそ
ひ車副まで物の具は一人も見せず出で來
たり大將宗盛出迎へ袖をひかへて言へら
くは今かばかりの大事あり入道殿さへ甲
冑を既に帶しおはせるに御裝束はいかに
ぞと言はせもはてず重盛はそも大事とは
何事ぞ國家に係る事をこそ大事とはいへ
是は只一家の私事といふべきのみ又重盛
は大臣の貴き職を帯びたるに近衛の大將
亦重しみだりに物具すべきかと尻り目に
かけて過行けり淨海はるかにこれを見て
法師に似氣なき身のさまをさすが心に
は宜つらん黒染の素絹をとりあへず引か
け着たれど「金物のかくれもあへず見え

けるを「絲きひ合せつゝみても包み兼ねたる胸の内はこぼろばしてぞかたらいける」

(新)二段

重盛つくく父の顔まもりついでありけるがあふる、涙おしぬぐひ容改めいへる様嗚呼今日の御有様現の事をも「思はれず」平家の運もいまは早「既に限り」の時ならむ重盛が世も之れまでと思ひ定めて候へば意の中にある事は残らずこゝに申さんと御心静めて聞き玉へとも此の世の中に四恩といひて重大の恩は四つある其中に朝恩をもて重しとす普天の下は廣げれどいづくが王土にあらざらん卒士の濱も王臣にもるるものなき理は尤より心得ましまさん我が家の祖貞

盛は天慶の賊將門を討ち平げし功あるも勸賞受領に猶過ぎず又御父の刑部卿得壽院造進の賞典をもてゆるされし内昇殿すら世の人は皆驚けりと申さすや去るを太政大臣の上なき御身となり玉ひ重盛輩の身を以て猶槐門の列に加り其上國郡大半は我が一門の田園たりこの大恩はいづくより受けたるものとおぼしめす此事をしもかへり見ずそゝろ怒りをかけまくも賢き院の御所にさへ轉さんとする御心は物に狂はせ玉へるか若し父君が此事をおしてもなさん御心ならば重盛はたゞ意を決し院の守護中に参らんのみかくする時は人子の父に刃むかふ道理なり「嗚呼悲しやな君が爲め忠ならむとすれば孝を缺きまた孝ならんと欲すれば不忠不臣の名を

負むこれをおもへば重盛が進退すでに谷
 れり願くは今重盛が頭をめされ賜はらん
 然して後は父君がおもほすまふにあるべ
 しと」且論し且歎き一心こめて言ひ放ち
 再びこらへず泣伏せば一座の人も皆共
 に涙にくれて詞なしさしも暴威の入道も
 ことわりせめし誠にはいかで争ふことを
 得む然らば今は何事もわれはいろはじ院
 参も思ひとまりて在りぬべし素より子孫
 の爲めにこそ心もさわげ吾は只老いて此
 世に望なし汝よろしくはからへと「いひ
 すとこそ引入りけれ」嗚呼此小松の枯
 れずして「大樹と榮え大宮の」柱とたち
 て世にありせば木曾の嵐もさばかりは意
 のまゝに吹かさらむひるが小島の荒浪も
 たやすくたちは起らしを世の浮きふしを

思ひねの夢に三嶋の神まうで法師の首も
 見たりけん世の行末も白波の千々にくだ
 くる岩田川淨衣に透きし薄襖の鈍色をさ
 へよるこびし心よわきはをしけれど忠孝
 文武完全の良臣の名は其殿に連ねかゝ
 げし常燈の「光りよりげにまさやけく」
 世々を照して臣の子のかゝみとこそはな
 りにけれ鑑こそは成にけれ

(新)扇の的(初段)

屋島の内裏のこなたなる牟禮高松の在家
 にあたり火の手ありといふ程こそあれ見
 るく四方に廣がりて「黒煙天をこがし
 けり」阿波の民部大音揚げて今の火の手
 は過にあらず敵より火を掛けたりと覺ゆ
 るなり軍の用意せよとて馳せ廻はる時は
 元暦二年二月十八日また東雲の程なれば

城・中・俄・か・に・騒・ぎ・立・ち・上・を・下・へ・と・返・し・つ・ゝ
 制・止・も・聞・か・で・混・亂・し・主・を・捨・て・親・を・願・ず・我
 先・に・と・逃・迷・ふ・「斯・る・所・に・源・氏・の・大・將・軍・九
 郎・判・官・義・經・は」紺・地・の・錦・の・直・垂・に・紫・裾
 濃・の・鎧・に・鍬・形・打・た・る・白・星・の・甲・に・紅・の・母・衣
 懸・て・二・十・四・指・し・た・る・小・中・黒・の・征・矢・を・負・ひ
 重・藤・の・弓・に・金・作・の・太・刀・を・佩・き・黒・き・馬・の・太
 く・逞・し・き・に・白・覆・輪・の・鞍・置・き・て・畠・山・重・忠・熊
 谷・直・實・平・山・季・重・土・肥・真・平・佐・々・木・高・綱・其
 の・外・宗・徒・の・郎・黨・を・引・具・し・て・城・の・追・手・に・寄
 せ・來・り・木・戸・の・内・目・げ・て・切・て・入・れ・ば・平・家・の
 方・に・て・音・に・聞・ゆる・越・中・の・次・郎・兵・衛・盛・繼・上
 總・の・惡・七・兵・衛・景・清・等・切・先・を・揃・へ・て・打・て・出
 で・追・ひ・つ・捲・り・つ・受・け・つ・流・し・つ・鎬・を・削・り・鏝
 を・破・り・火・花・を・散・し・て・攻・戰・ふ・組・て・刺・違・ふ・る
 者・も・あ・れ・ば・真・甲・切・ら・れ・倒・る・ゝ・も・あ・り・手・負

を・助・く・る・暇・な・く・死・骸・を・あ・ぐ・る・隙・も・な・し・互
 に・名・あ・る・勇・將・猛・士・が・爰・を・専・途・と・争・ふ・さ・ま
 は・何・時・果・つ・可・し・と・も・見・え・ざ・り・し・に・「牟・禮
 高・松・の・黒・煙・次・第・」に・覆・ひ・來・て・已・に・矢・倉
 も・落・ち・け・れ・ば・平・家・も・今・は・叶・は・じ・と・各・船・に
 取・乗・て・「沖・を・遙・に・遭・出・で・ぬ」行・方・定・め・ぬ
 浪・の・上・須・磨・や・明・石・の・浦・々・も・寄・る・べ・渚・の・捨
 小・舟・お・き・ふ・し・な・れ・も・し・ら・ま・弓・い・つ・し・か・今
 は・引・か・へ・て・今・日・の・味・方・も・明・日・の・敵・敵・か・味
 方・か・矢・か・楯・か・淵・瀬・し・ら・れ・ぬ・舟・の・中・心・細・く
 も・帆・を・揚・げ・て・風・に・任・す・る・身・の・上・は・思・ひ・し
 ら・れ・て・哀・な・り・爰・に・平・家・の・陣・よ・り・花・や・か・に
 飾・り・た・る・一・葉・の・舟・渚・に・向・ひ・て・漕・寄・す・る
 頃・は・二・月・廿・日・の・事・な・れ・ば・霞・も・風・に・打・な・び
 く・柳・の・五・重・に・紅・の・袴・着・て・袖・笠・被・け・る・女・房
 あり・日・の・丸・の・扇・を・杖・に・挿・み・舟・の・舳・頭・に・指

し立て、是を射よとぞ招きける此の女房こそ建禮門院の後立の時千人の中より撰まれたりし玉蟲の前舞の上手と聞えければ歳は今年十九歳雪のびんづら霞の眉姿貌に至るまで繪にかくとも争でか筆に及び得ん折節夕陽に映きていと色こそ増りけれ

「鬼を欺く丈夫が」互に生死を争ひて船と陸とに立分れ弓矢たばさみ掌を握りにらみ合ひたる折にしもあな面白の景色やと人皆ともにいひはやすそゝる浮き立つ人心波も玉散る海の面に花に霞に別れ來し都の春のことをしも思ひ浮べて眺めつゝ判官是を見給て畠山重忠を召されあの扇射よといふに射すしておくも無念なり汝一矢に射落せとありければ畠山重忠

畏りて君の仰家の面目こよなき事と存ずれど是は由々敷晴のわざなり重忠打物取ては鬼神といふとも更に辭退は仕らず弓矢の藝はつたなく候へばもしも射損じて敵の笑を受け候はゞ重忠の恥はさる事なれども源家一族の御瑕瑾と存するなりぞもく下野國の住人那須太郎助宗が子に十郎與市兄弟は弓矢の達人と承れば箇様の小物に賢く仕らんと申しければ直ちに十郎をぞ召されける十郎畏り御誼の上は子細申す可くも候はねど去年一の谷坂落しの時馬弱くして弓手の臂を砂に突かせ侍りしが疵なほ癒えずして定の矢仕るべくも候はず弟與一宗高は一定仕り候はん仰付られ候へと弟に譲りてぞ扣へける

(新)二段

宗高其日の装束は紺村濃の直垂に緋威の
 鎧着て鷹角反甲を猪首に着なし廿四指
 したる中黒の矢を負ひ重藤の弓を持って赤
 銅作の太刀を佩き宿赫白馬の馬の逞しき
 に洲崎に千鳥の飛散たる具鞍置てぞ乗た
 りける判官の召に従ひ馬より下り甲を高
 紐に懸けて畏る判官申されけるはあの扇
 仕れ晴の所作なるぞよ不覺すな宗高承り
 仔細申さんとすれば伊勢の三郎後藤兵衛
 など面々の故障に日も早暮なんとす兄の
 十郎さし申たる上は仔細申すまじ海上暗
 くならばゆゝしき味方の大事なり疾く急
 ぎ玉へと言ひければ宗高せん方なく甲を
 童に持たせ烏帽子引立て薄紅梅の鉢巻し
 て手綱搔くり扇の方へぞ向ひける生年十
 七歳の若武者なれば色白くして小髭生ひ

弓の取様馬の乗姿優なる男にぞ見えたり
 ける波打際に打よせて見れば「弓手の方
 には主上を始奉り國母建禮門院北の政所
 二位殿官女其外船を漕ぎ並べ楊梅桃李と
 飾られて屋形の前後御簾も凡帳もさゝめ
 きたり妻手の沖には平家の大將軍大臣殿
 を始とし平大納言教盛新中納言知盛以下
 平家の一門其餘の諸將居並びて數百の
 兵船を乗浮べ鎧の袖を列ねて是を見る後
 の方には源氏の大將軍九郎判官義經を始
 め士大將に至るまで各駒を乗据ゑて拳を
 握りかたづを呑み鳴を静めて音もなし遠
 近皆遠淺なれば鎧の菱縫の板鞍爪の濡る
 まで打入れて」はやりにはやる我が駒を
 手綱ゆり据ゑく鎮はれど寄する小浪に
 物懼れ足も止めず狂ひひり扇の方を見渡

せばあはい七段ばかり隔てたり折しも西
 風吹來り舟は波間に漂ひて「扇は串に定
 らず」風のまに／＼廻りけり宗高運の極
 りと眼を閉ぎ心を静め南無八幡大菩薩別
 けて下野國宇都宮那須大明神弓矢の冥加
 有るならば扇を坐席に定めて玉へ源氏の
 運盡き家の果報も是迄ならば矢を放たぬ
 先に海中に沈め給へと心に深く祈念して
 眼を開き打見れば「風も少しく吹弱り扇
 は座席に定りぬさては神力指添へたり我
 が物なりと思ひつゝ矢比は少し遠けれど
 十二束三伏の鏑拔出し重藤の弓に打番ひ
 暫し固めて思ふやう扇の面の口の丸は日
 を射るの恐あり要のほとりを射切らんと
 「心を静めて切て放つ」其の矢海上遠く
 鳴り響き狙ひ違はず要より射切たり要は

船に留りて扇は空に舞ひ揚り暫しが程は
 さまよいて海へ颯とぞ落ちにける折節夕
 日に輝きて波に漂へり源氏は鞍の前輪を
 叩き籠をたゞき平家は舷を打鳴らしどつ
 と揚げたる鯨波の聲山も崩れて海も湧く
 ばかり「暫しは鳴りも止まざりけり」鳴
 呼宗高が此の日の譽れ幾萬年を経とても
 朽ちぬ程さぞ目出度けれ

(新)四條 暇(初段)

時しも御代は正平の三年の春の始にて吉
 野の山は白妙の「雪に梢を埋められ」萌え
 出る木々の下草はみな足利の足に踏れ敷
 れて哀にも延る力もなよ竹や折ても操變
 まじと誓ひし公は去年の冬吉野に詣て大
 君の龍顏拜し奉り亡父正成が先帝に仕へ
 て忠を盡したる其赤心を受繼て我とも心

筑紫瀉浪と寄せ來る賊軍を拒ぎ戦ひ退けて君の叡慮を休めんと思へど我は不幸にも病の多き身なる故空しく月日を過す内若しや病に冒されて褥の上に玉の緒の絶る事の有ならば君の爲には忠ならずなき我父に孝ならず病の爲に果敢なくも黄泉の鬼と成らんより此所に寄來る賊兵と刃を交へ潔く命を捨て、忠孝の道を全ふせんものと思ふ心を有明の月の君とも稱へつる隆資卿に細々と告るを何時か大君は御簾の内より聞し召最かしこくも行在の南の椽の端近く出御したまひ拜謁を許したまひし其時に朕は汝を股肱ぞと思へば深く己身を厭ひ慎み必らずと生て歸れと有がたき御語下し給はれば朝臣は地に額つき「只伏拜む計りにて」答へ奉らん言

の葉も涙の雨に折伏れて擡げ兼たる風情なり

(新)一段

朝臣は漸々立上りあつき涙の降かゝる「鎧のをを拂ひつゝ」徐に行在を退りいで一族郎等を随へて先の皇帝の御陵に參詣て前に跪き戦ひ若も利あらざれば生て返らぬ覺悟故此世の別辭告ん爲遙々此所に參りしと云ふも濁れる涙聲濡てぞ量き袂をば絞りもあへず立上り如意輪堂に赴きて御佛拜み奉り夫より堂の壁の面に死を誓たる義士の名を記し、數は百餘人朝臣は鏃取出し落る涙を拂ひつゝ氣を張りつめて梓弓引返さじと思ふよりなき數に入る忠臣の名をぞとむむる名歌をば彫つけ給ひ去はとて吉野を發し河内なる

「四條畷にうち向ふ」時は十二月のはぢま
り七日の日にぞ有にける

(新)二段

一夜の夢に去年と暮明れば年も新玉の春
とはいへどまだ寒き「北山おろし吹ま
に」旗翻し攻來る八萬餘騎の賊軍と四條
畷に戦ひて身をも家をも打忘れ只大君の
御爲と矢猛心を振起し力を極め身を盡し
拒甲斐もあらばこそ篠突如き矢の雨に痛
くも其身を痛められ肉裂け血汐滴りて今
は一步も進まねばいざ是迄と大君の在せ
る方を伏し拜み賊の方をば打にらみ骨肉
分けし同胞と互にさしつさゝれつゝ飯
森山に程近き四條畷の夕けむり消て歸ら
ぬ旅の空ふむ道柴の露とこそなられし公
ぞ悼ましき去れど朝臣の功績は譽となり

て千代よろづ後の世迄も著しく「吉野の
花と諸共に今尙四方に香しく」忠臣孝子
の鑑ぞと内外の國に薫るなり内外の國に
薫るなり

(新)俊 寛(初段)

あだまもる筑紫のはての薩摩瀧鬼界が島
のあら磯に治承元年夏五月流され給ひし
人々は右近衛の少將成経檢非違使平の入
道康頼法勝寺の執行俊寛「僧徒の三人な
り」うき艱難を此島に送り給ふ其うちに
大赦の令をぞ傳へらる思ひもかけぬこと
なればあらありがたき御誕やと三人ひと
しくひざまづさうやくしくも令狀を押
戴きて成経はうれしき涙に袖ぬれて聲も
ふるへてさらくと讀得給はぬ形勢を康
頼取りてやうくによみあげたまふ趣き

はこのたび中宮御産の御祈禱に非常の大
 救行はるにより鬼界が島流人のうち成經
 康頼を赦免すと讀給ふ時俊寛はあつと驚
 きかしらを揚何とて某が名を讀落し給ふ
 ぞと言葉せはしく問給へば康頼も打驚き
 て聲うるみ實にいぶかしきことなれど御
 名は更に見え待らず俊寛聞て扱は筆者の
 あやまりか今ひとたびよませ給へとあり
 けるを使の元康すゝみより都にて承り候
 も成經康頼のふたりは御供いたせ俊寛ひ
 とりは此島に残し申せとの御事なり嗚呼
 こは如何に何事ぞ罪も同じく配所も同じ
 非常も同じ大赦なるに獨り誓ひのあみに
 もれ沈むは何の因果ぞやけふまでは三人
 一所にありてすらさもおそろしくすさま
 じき荒磯島に只ひとり離れて海士の捨草

の浪のもくづにあらねどもよるべもしら
 ぬうき身やと歎くにかいもなぎさなる千
 鳥と共に鳴ばかり思ひにあまる俊寛はさ
 きに讀たる卷物をいくたびとなく打開き
 あとくりかへし見給へど成經康頼とある
 ばかりにて僧都とも俊寛ともかける文
 字は更になしこは又夢かまぼろしか夢な
 ればさめよくとのたまひて「獨り涙に
 くれたまふ

玉兔晝眠雲母地

金鶏夜宿不萌枝

寒蟬抱古木

鳴盡不回頭

といふ詩の心は俊寛僧都の身の上と「今
 こを思ひしられけれ

(新) 一段

去程に時刻うつりてかなはじと楫子の言
 葉にせかれ來て名残は更につきねども成

經は夜の衾を康頼は法華經一卷を「各か
 た身に殘し置き」さましくなくさめ參
 らせて船にのらむとし給ふを俊寛袂にす
 がりつつ元康聲をあらゝげて僧都は叫ぶ
 まじといひ放つ嗚呼うたてやな公の私
 といふことあれはせめてはむかひの地ま
 でなりとも情にのせてつれ給へと涙を袖
 につゝみかね泣のたまふ聲の終らぬに哀
 れや無情の楫子どもが櫓を振揚うたむ
 とす俊寛今は叶はじとや思ひけむする
 袂の手を放ち一時は宿に歸らむと踵は
 あとにかへせともかへらむものは心にて
 楫子の無情も元康の怒る言葉も打忘れ又
 立寄りて出船の綱にとり付引とむる楫子
 とも綱をしぎつて船をふかみに押しい
 だすせむかた涙にをどりこみ船よくと

呼はれどかへす模様もあらざればちから
 及ばず俊寛はもとの渚にひれふして彼の
 松浦さよ姫の歎きもわれに及ばじと「悲
 しみ給ふもあはれなり」時を感じては
 花にも涙をそぎ別れをしみては鳥にも心
 を動かすといふことあれば人としてなだ
 き別れの悲しみをしらぬものこそなかる
 らめされば成經も康頼も涙ながらにさし
 招きわれら都にのぼりなば善やうに取り
 なしてやがて御迎に參るべし心強く待た
 せませと宣ふ聲もかすかなるたのみを濱
 のまつかげに聞やいかにとゆふ浪のよす
 るまに／＼俊寛は只手を合せ頼むぞと呼
 はる聲も呼聲も「次第／＼に遠ざかる」
 船もかすかに人かげも消えて見えなく成
 にけり消えて見えなくなりけり

(新)阿新丸(初段)

日野中納言藤原の資朝卿は後醍醐帝の密旨を奉じ北條高時をほろぼして「大御心をやすめむ」と思ひをこらし給ひけり」茲に土岐の頼員は此資朝卿と一味のちかひたてながら妻に心のひかされてある夜のむつごとにくちばしりしが基にて事たちまちに六波羅へ洩れきこえしかば高時はしばしも猶豫なさはこそ資朝卿を佐渡といふ遠き島にぞ流しけるいたはしや資朝卿の御子阿新丸は世にもかしこき母君と仁和寺あたりのかくれ家に住せ給ひて世の中の無常を深くかこちつゝまたの逢ふ瀬をたのしみに指折かぞへ待給ふ其甲斐もなく高時は長崎高資の言葉を容れ佐渡の守護本間山城入道に下知をなし

資朝卿を殺さむといふ企を傳へ聞く阿新丸は此時十三歳にてましませど親をおもはず真心はいはほも通す桑のゆみなき數にいる父上の其御最後を見届て共に冥土の旅まくら結ばむものと思ひたち突然母君に此事をあかし給へば母君は聲ふるはして涙ぐみわすれもやらぬ去年の夏御父君につれなくも別れまつりし其後は御身ひとりを此家の杖柱ともおもへるに今又御身と別れては此母親が生ながらふべくも思はへずましてや佐渡とやらむは人も通はぬ怖ろしき離れ島ともきこゆるを幼き御身いかゞして行べきたよりのあるべきぞ思ひとゞまり給へよと宣ふうちに御聲は涙の雨に打しめりさぬのたもとも見るうちにしぼるばかりに成にけり阿

新丸はきこしめし恩愛深き母君の仰せに
 そむくも不孝なり又父上の御最後におく
 れ申も不孝なり嗚呼母君に仕へむか御父
 君をいかにせむ御父君に仕へむか御母君
 をいかにせむいづれにしても兩親に孝を
 全うすることはとても叶はぬ此身なり今
 宵のうち自害して御詫を申す外はなし
 とおさな心のひとすぢにおもひ詰たるあ
 りさまを此方にいます母君はとく見そな
 はし此上にいたくとめなばまのあたり又
 憂目をや見るらむと思ひかへしてさき
 くは兎にも角にも阿新丸が望みに任せ
 おかむとて心さゝたる仲間を差添られて
 かくれがをいでます君がうしろ影見送る
 慈母のかなしみはなかく筆につくされ
 ず昔時めく御家も今は乗べき駒さへもあ

らぬ歎きを打すてはきもならはぬ「草
 鞋に菅の小笠を傾けて」露はおかねど草
 枕思はぬ旅に出給ふ心の中こそ殊勝なれ

(新)一段

去程に阿新丸はやがて越前の敦賀より船
 にめされて海原の「八重の潮路を打渡
 り」佐渡の國にぞ着給ふ」たよる家とて
 あらざれば本間が館におとづれて某は日
 野中納言資朝の一子にて阿新丸といふも
 のなり父が此世にいますうち逢ひ見むも
 のと玉敷の都をいでて足引のけはしき山
 も海神のいかる浪路もはいからずはる
 く越えて此佐渡にまかり下りしあはれ
 さを聞わけられて對面をゆるし給へと懇
 にくりかへしつゝ宣へど本間なかく聞
 入す資朝卿をいれおさし牢屋のうちを目

の前に僅へだてゝこなたなる持佛堂にぞ
 いれにける資朝卿は此とをきこしめされ
 て打しほれ生て逢ふと叶はずば死して千
 草の葉がくれにひとりまろびて思ひ寐の
 夢に見もせむ逢もせむと悲しみ給ふ御す
 がた「よその見る目もあはれなり」扱日
 は西に入相の鐘の響ともろともに行水
 を奉れば資朝卿は最後の時になりぬとて
 用意の駕籠にぞめされける爰より十丁ば
 かりを隔てたるさびしき河原のありけ
 るが程よき所に人夫らが駕籠昇すえて
 扣ふれば資朝卿臆し給ふ氣色なく敷皮の
 上に居直りて世辭の頰をぞかゝせ給ふ

五蘊假成_ニ形_ス 四大今歸_ス空_ニ

將_テ首當_ニ白刃_ニ 截斷_ス一陣風

其奥に嘉曆元年五月二十九日日野中納言

藤原資朝と記され給ふやいなや河原の
 あしに身をこがすほたるの影は太刀風に
 さつと散りてぞうせにけるやゝありて御
 なきながらを阿新丸に奉れば阿新丸ひと目
 見給ひて足手もなえて倒れ伏し嗚呼情な
 き本間かな海山越えてはるくくと來りし
 われに告もせでなきがらばかりあたへし
 はかへすくも口をしと御袖顔にあてた
 まひしばし人目も憚からず泣ふし給ふ
 「ありさまは實にことわりとしられけり」
 暫くありて身を起し「無念のなみだ押拭
 ひ」めし使ひたる中間に其なきがらを守
 らせて高野山に送りつゝ「御身はあとに
 留りて思ひにしづみ給ひしは」これ又深
 き所存のあることゝのちにぞ思ひしられ
 ける

(新)三段

去程に阿新丸は其鬱憤を晴さむとひるは病といつはりて旅のころもをしきたへの「牀にふしてぞ忍ばる」夜はひそかに起いでて「本間がねやを伺ひ給ひ隙もあれば親子のうちひとりたりとも刺殺し腹を切らむと思ひ詰めしのびくっておはせしがある夜あめかせはげしくて番の者ども油断をなしおもひくいにねければ願ふ所の幸ひといさむ心を押し沈めそつと伺ひ見給ふに本間が運や強かりけむ常のふしどをかへたれば猶奥深くしのびいりさがし給ふにふたまなる奥にあたりて燈火の影明らかに見えたれば板戸の外にを身ちいめ首さしのばし見給ふに目ざすかたきにあらずして資朝卿を斬たりし本間三

郎にてありければ案外なれど是も又時にとりてのかたきなりあるじの入道にまさるともよもや劣りはいたさじとふた足三足すゝみより息をこらして立給ふもとより腰に太刀はなし殊にともしびあかければ干にひとつも目をさまし聲たてられては一大事いかゞはせむと腕をくみ案じわづらひ給ひしが折節夏の事なれば蛾といふ蟲が燈火の影を慕ひて飛くるをうちにいれむと思ひつゝ障子を少し明給へばあたりまばゆきともしびの光はつひに蟲のため消えてあとなく成にけり仕済したりと思ひつゝかれが所持なす一刀をとるより早く抜き放ち首落さむとしたまひしがいねたる人をうたむこと死人を斬るにことならず目を覺させて刺さむとて足踏な

らし立掛りはたと蹴放す小枕の音に驚き
起あがる本間がうへにまたがりて臍のう
へよりたゝみまで柄も拳もとほれよと力
にまかせ指通しかへす太刀にて喉笛を心
のまゝに搔きつてうしろにあたる竹村の
「うちを目掛けてしづく」とかくれ給ひし
ふるまひは實にを、敷ぞ見えにける

(新)四段

去程に番の者はこのおとに驚かされて狼
狽しとるものもとりあへず馳あつまりて
燈火をとぼして見れば「こはいかに」幼な
き人の足あととは「阿新丸どのに相違なし
いざ打とらむと松明をかざして庭のすみ
までもさがせど影もみとめ得ず阿新丸は
人手に渡らぬ其さきに自害せむとは仕給
へどまださきくに望みある身の上なれ

ば今こゝをのがれて帝の御馬前に功名手
がらあらはして父の宿意も達しなば是こ
そ忠臣孝子なれと思ひ返してふる雨にぬ
れてなびける吳竹の枝にすがりてやうや
うと高さ梢によちのぼり目にあまりたる
大堀をやすく越えて烏羽玉の夜はまだ
深き牛寅のころほひなれば幸ひと磯邊の
かたを心掛たどり給へど夏の夜はまだ宵
ながらあけぬるを雲のいづこに月やどる
らむと謠ひし如く横雲ははや遠山の端に
あけ離れ見あらはされぬ其ひまに麻や蓬
のしげりたるふかみがなかに身をかくし
「追手をのがれ給ひけり」終に其日も暮け
れば「又忍びいで行給ふをりから神も孝
行の志をや感じ給ひけむいたく老たる山
伏にはたと行合ひしか事の仔細を宣へば

山伏聞て哀れに思ひ御心やすくおぼしめ
 せと足もたゆめる阿新丸を肩にかきのせ
 足ばやにゆけば程なくあら磯の浪打際
 に出にけり遙の沖を見渡せば今もや船の
 出なむとするを手をあげさし招き呼はり
 けれど楫子共は更に是をば耳にせず櫓權
 を立て漕いだす山伏大にはらをたて柿の
 ころもを結びあげ漕行船に立むかひいら
 たか數珠をさらくと音もはげしく押揉
 て秘密の呪文をとなへ明王を本誓誤らす
 ば權現、金剛童子、天龍夜叉、八大龍王、其
 船こなたへ返し給へと肝膽を碎きつゝを
 どりあがりて祈りければ其念力や通じけ
 む俄に逆風吹起り逆卷なみに大船もくつ
 がへらむとする形勢に楫子ども大に恐を
 なし山伏の御房助け給へと手を合せ膝を

かゝめて伏し拜み船をなぎさに漕戻す
 「左こそあらめと山伏は」阿新丸を助け
 あげ水主の乞に任せつゝ屋形のうちに入
 りければ波風忽ちしづまりて船は湊を出
 にけり此時きのふの追手ども百四五十騎
 馳來り其船戻せと鞭を揚げ皆同音に呼は
 れど順風に帆をあげてはせ行船のとなれ
 ば見るく影もきえうせて船は其日の夕
 まぐれ「越後の府にぞ著にける」嗚呼阿
 新丸の真心は天津みそらの月と日の光り
 と共にあかねさす我日の本にかゝやけ
 り我日の本に輝けり

(新)楠公(初段)

延元元年五月のはじめ足利尊氏同左馬頭
 直義大勢を引率し都へ攻のぼる趣新田左
 中將義貞「急使をもつて奏問ありければ」

宸襟もつともやすからず楠判官正成をめ
され急ぎ兵庫へ下向して義貞にちからを
合せ合戦すべしと仰せらる正成かしこま
りて奏聞しけるやう尊氏すでに筑紫九ヶ
國の勢を率る上洛するとなればさだめて
勢は雲霞の如くにぞ候はむ味方の疲れ果
たる小勢にて機に乗じたる大勢にかけあ
はせ尋常のごとくに戦はば味かたの敗
北は鏡にかけて見る如し急ぎ新田をめさ
せられ前の如く山門へ御臨幸在らせらる
べししからは正成も河内へくだり畿内
の勢をもつて河尻をさし塞ぎ尊氏をみや
こへすゝませて雙方より兵糧の道を斷ち
さらば敵は次第く衰へて味方は日々
に集るべし此機に乗じ新田は大手より押
よせ正成は搦手より攻のぼらば朝敵を一

戦にはろばさむ事何の疑か候ふべき新田
も此所存とは存じ候得ども敵を眼のあた
りに受ながら軍もせで引揚むこと人のお
もはくもいかいあらむと終に兵庫にさゝ
へしならむ合戦は兎も角も軍は始終の勝
こそ肝要なれ能々叡慮を廻らされ公議を
定めらるべしと奏聞ありければ坊門の宰
相清忠進みいでて申さるゝやう正成の言
ふところそのいはれなきにもあらざれど
も征討のために差下されたる節度使がい
まだ戦をせざるさきに帝都をすてゝ一年
のうち兩度迄山門へ御幸あらせられむこ
と一は帝位の輕さに似一は官軍の道を失
ふなりたとひ尊氏筑紫の勢を率る上洛す
とも昨年東八ヶ國の兵をしたがへてのぼ
りしとき勢にはよもすぎじ凡そ戦の初

めより味方の小勢をもつて敵の大勢を攻なやましたるはいくたびぞ是武略のすぐれたるにあらずして全く聖運の天に叶ひしゆゑむなりしからば戦を帝都の外に決し敵を鐵鉞の下にほろぼさむこと何の子細かあるべきぞ只時をたがへず正成を差下されむこそしかるべけれと奏聞ありければ公議これに定まりて其旨勅諭あらせらる正成は最早せむかたなしと屈竟の精兵五百餘騎をしたがへて五月十六日に都を立て「急き兵庫へぞ下りける」

爰にまた正成の一子正行は今年十一歳なれども父の決意を察せしにや何處までもと従ひ行正成思ふ所存のありければ櫻井の宿において正行を膝元ちかくめしよせてつくぐ教へさとされけるは彼の獅子

といふ猛獸は子を産みて三日をすぐるにあたり數千丈の絶壁より谷底深く擲落す其子獅子の器量あればちゆうより刎かりて死せずといへり況むやなむぢは人界に生を得て「既に十一歳にもなりぬれば」父がをしへは守るべし此たびの合戦は天下安危の定まるところわれ討死せむ其後は尊氏天下に縦横し叡慮を惱まし奉らむ汝正行其不義の勢ひに恐れ身命を助からむため多年の忠烈をすてかれに服従することなかれ一族郎黨の一人たりとも生きたなからへてあるならば金剛山に引こもり敵よせきたらば命ちを由基が矢先に掛義を紀信か忠に比し一步も退くことなかれ此肌のまもりはひとせ都攻のありし時かたじけなくも帝より下し賜ひし

繪旨なり今は是をば譲るべし父が志を
繼ぎ帝に忠義をつくしなば是を親への孝
行と申し含めて正行の顔のあたりに手を
あてて是が此世の見終めとおもへば猛き
大丈夫の心もいまはみだれかみかきあけ
つつもいくたびかふりかへり見てなく
いも名残をしげに別れける世の盛衰を
觀察し一子を殘して無き跡までの義を勸
むる心のうちこそ殊勝なれ

(新) 一段

時しも五月二十五日煙波渺々たる海の面
十四五里がほどに「數萬の兵船帆をあげ
て寄きたる」かゝる所に須磨の上野と
鹿松の岡嶋越の方よりふたつ引兩四ツ目
結び左り巴とらの旗五六百流朝の嵐にひ
るがへし雲霞の如くに寄かけたり正成こ

れを見て舍弟帶刀正季に申さるゝやう敵
海陸を遮ぎりて味方は陣を隔てたり今は
のがれぬところなりまづ前なる敵を追ま
くりうしろの敵と戦む正季之を承り我手
七百餘騎を前後にそなへ大勢の中へ割て
入る直義の兵ども菊水の旗を見て能き敵
なりと思ひければ取りこめて討むとしけ
れども正成正季東より西へ切て通り北よ
り南へ追なびけ能き敵と見受れば馳なら
べ組ひで落ては首を取り雜兵の奴輩はひ
と太刀打てかけちらす正成と正季と七
たび合て七たびわかる其心偏に直義に近
づき組て討むと思ふにあり遂に直義の五
萬騎は正成の七百餘騎に切立られて「又
須磨の上野の方へぞ引かへす」直義の乗
たる馬は鏃を蹄に踏たてゝひるむ所を

正成の軍兵ども是を見ていざ討とらむと
 駈よるを薬師寺十郎次郎只一騎蓮池の堤
 にてとつてかへし駒より飛で下り長刀
 の石突をとりのべてよせくる敵の馬のひ
 らくびむながひの引廻し等切ては刎倒し
 倒しては刎またくひまに七八騎ほど切
 て落す其ひまに「直義は駒を乗かへてや
 うく落のひたり尊氏此よしを見て荒手
 を入れかへて直義をうたすなと下知すれ
 ば吉良石堂高上杉の人々六千餘騎にて湊
 川の東へ駈出あとを切らむと取り巻たり
 正成正季又取てかへし此勢に渡り合せう
 ちつうたれつ火花をちらして戦へど軍
 兵ども「其身鐵石にあらざれば」次第
 く打死し残るは僅七十三騎なり此小
 勢にても敵を打破り落なば落べかりける

を正成都を出る日に思ひ定めしことあれ
 ば皆討死と覺悟して湊川の北にあたり
 し一と村へ七十三騎引揚てやすらふうち
 に一族は軍兵どもと「もろ共に腹掻切て
 どうせにける」正成正季に申さるゝや
 う」をもく最後の一念に依り善惡の生
 を引といへり九界のあひだにいづれか願
 なると問ひければ正季打笑ひなゝたび人
 間に生れ來て朝敵をほろばさばやとこそ
 存候へと申ければ正成世にうれしげな
 る氣色にて罪業深き惡念なれ共我も左や
 うに思ふなりいざさらは同しく生をかへ
 此本懷を達せむと誓て「兄弟差ちがへ一
 ツ枕に伏されけり」嗚呼此最後こそ實に
 武士の鏡みなれ嗚呼此最後こそ實にも
 のふのかいみなれ

(古)島原合戦(初段)

國を申せば肥後の國在所記せば割府といへる扱も在所に赤星源次綱明とて「弓取一人おはします」其比肥前に深く味方召れける」年號申せば天正九年辛巳の比は卯月七日と申すに肥前の國主龍造寺山城守隆信方より使者の參るいかに申さん赤星殿主君の爲め誠に肥前に味方召さるゝ者ならば人質を給はれとの御諚也赤星言葉に國主の御意とは申せども誰をか質に參らせん其時使者の言葉に承れば歳は十四に成らせ給ふ松若殿とて若のあるよし肥前屋形に隠れなし彼の若を質に給はれ赤星殿と有ければ赤星言葉に若を一人持ては候得共彼の若を質に渡しては跡の歎きは如何せん去れど又國主の御

意には叶ふまじと若を召寄せ御尋ねあれは若の言葉に某國にありならば二人の親の御奉公又は國の替りとなるならば質に渡らん事御心安く思召せ頓て御供の士十八人を召連れ肥前の如く御渡なされ佐賀の屋形に伺候有るこそ「中々物の哀れなれ」未だ三日も過ぎざるに「重ねて使者の參るいかに申さん赤星殿承れば年は八つに成らせ給ふ安千代殿迎姫の有る由肥前屋形に隠れなく未だ幼少なれ共彼姫を質には給る物ならば若の所は國の如くに返すべきとの御定也赤星言葉に扱は中々若を一人出してさへ跡の歎きは如何せん況してや幼少の姫を質に出しては跡の歎は猶増さる去れ共國主の御意には叫ふまじと姫を召寄せ御尋ねは姫の言

葉に二人の親の御奉公又は兄様の御身代りと或るならば今日鎌倉迄も登るべし況や肥後と肥前は近き間と承る質に渡らん事御心安く思召頓て女房六人士二人を召列れて肥前の如く御渡りなされ佐賀の御内に「兄弟共に伺候有る社何より物の衰れなれ」是は扱置爰に又肥前に於てつれなき士隈部左馬介親興と申せしは三とせ以前赤星殿と堤の論を召れしが痛はしや隈部殿召負なれば赤星殿より三百餘町を踏み取られ無念至極はなかりけり如何にもして赤星に腹切らせんと思ふ折節なれば是社能き折柄と心得隆信殿に作り文を上げ給ふ隆信殿は彼の文を披見なされ赤星は肥前に兄妹の子供を質に渡し其上ながら薩摩に味方肥前に二張の弓

を引との文なれば隆信大きに腹を立其儀ならば肥前に於ても法度の仕置に任せ生礎と御意下る痛はしや兄妹は肥前屋形に三日も置ずして肥則肥後の境なる南の關竹の夜原に送り有る社「何より物の哀れなり」若の言葉に兄弟共に御殺しある物ならば肥前屋形にて只一太刀に御殺あるべし御殺ある迎も士が塀垣越えて隠れ忍びは致すまじ士は疊の上に生れ來て野原にて死するか本道とは承る夢にも知らぬ野原にて面は月日に晒されて長く浮名の立と思へば是が一つのいかせん只今敵と引組て討死致すものならば簡程に物は思ふまじいかに申さん隆信様某は男の身にて御殺有る迎も苦しからず幼少の妹は國に御返し給はれと日には三度の詫

をなす姫の言葉に自らは女の身にて苦し
 からず兄の所は赤星が家の世繼の事なれ
 ば國に御返し給はれ隆信様と日には七度
 の詫をなす隆信御定に如何に兄妹科な
 き隆信を恨み給ふな謀叛心の父の赤星を
 恨み給へと御意下る姫の言葉に科なき隆
 信様も恨み申さぬ況てや父の赤星も恨み
 申さぬ中より作り文を上げたる隈部殿こ
 そ今生後生の恨みなれ若の言葉に如何に
 安千代何某の子孫といふて女にこそは生
 れ來て人を恨みては如何せん死出の山三
 途の大川左京が橋迄も一つ道ぞと喜び給
 ふこそ哀れなれ若の其日の装束には先
 肌よりは白地練絹著上には紫染にひはだ
 色のくゝり小袴しつかと召れ十八人の士
 を御側に召されいかに方々鳴を静めて聞

給へ某兄妹は隆信様より身に覺なき科に
 上意の宣ふ也逆も上意は逃るまじ御身達
 は暇取らす何國の様にも落行て我に増
 したる剛き主人を頼み給へと仰せける十
 八人の士は頭を地に附け皆一同に言葉を
 揃へ嗚呼情なき若君様の御誕やな士が
 強き時は主人と頼み今弱きとて君を振捨
 る法やあらん兎にも角にも若君諸共にと
 申上れば若君斜に悦び十八人の士に御盃
 を給はりける爰に又姫の其日の出立には
 先肌よりは十二小袖を召されける上著は
 其頃肥後に流行りし白絲小袖召重ねたけ
 と一世の黒髪は月の輪形にゆい給ひまげ
 の絲にてみふし留め頓て六人の女房達を
 御側に召れ如何に旁々鳴りを静めて聞給
 へ自ら共兄妹は身に覺なき科に上意の宣

ふなり迎も上意は逃るまじ御身達は千に
 一ツも隆信様より御暇給はる物ならば國
 の如くに落行て二人の親の御前に参り
 自分兄弟斯く成りたる有様を一事も残ら
 ず申上よと仰ける六人の女房達は唯涙に
 咽びて誰も御返事申す人もなし痛はしや
 彼兄弟は頓て檢使を御側に召れいかに檢
 使の方はたの板は古より定まる法西へ向
 るか本道とは承はれど某兄妹は肥後の方
 へ向け給はれ左もあらば割府の在所に二
 人の親の有ると思へば吹來る風迄なつ
 かしやいかに檢使の方と宣へば檢使承り
 當城は往古より傳はる儀式はたの板は東
 に向るは天下に恐れあり御身達兄弟迎も
 西へくと有ければ痛はしや兄弟はもふ
 は力に及ばず左右の手を差上げ肥後の方

を打招き嗚呼なつかしや割府の御所と七
 度招きてはたの板に召れけるこそ中々物
 の哀れなり彼兄弟は士の義理なれば三
 日が間は小歌拍子にて過させ給ふ痛はし
 や姫君は未だ幼少の事なれば四日に當る
 酉の刻竹の夜原の朝の霜と消へ給ふ若の
 言葉にいかに安千代未だ此世に有るか無
 さかと聞給へば答ふる者は竹のよ原の
 原闇き磯打浪に空飛鳥の「羽音計りにて
 いとど哀れは増さりける」若君も次第
 くゝに衰へて七日に當る扱も午の刻竹の
 夜原の朝の露と消へにけり中々物の哀れ
 なり十八人の士は皆一同に肥前屋形に亂
 れ入らんと思へ共多勢に無勢の事なれば
 力に及ばず皆はたの板下に立寄りて思ひ
 くゝに清く自害を致しける何より物の哀

れなり頓て此由隆信殿聞召れ姫に附添ふ
 六人の女房達を御前に召れ何に其方達は
 是より暇とらする何國のやうにも落行て
 思ひく身に雪げよと御意下る勝の前
 進み出申す様嗚呼情なき隆信様の御誼か
 な某は二十の歳より御乳を上げにし姫君
 さへも御助けなきに數ならぬ我れく共
 に御暇給はる、共國に歸りて如何せん
 思ひく清く自害をとげにける未だ惜
 かる歳は勝の前が二十七萬勝の前が二十
 五千勝の前が二十一小宰相が二十小櫻が
 十九小相が十六何れも劣らん花盛り夜半
 の嵐に誘はれて散て行くこそ哀れなり
 頓て此由割府御所に洩れ聞へ赤星殿聞し
 召れ扱は中々是は又夢か現か幻か夢なら
 ば覺てもゆけ現なら消えてもゆけ幻しな

らは暫しが程は松の葉にも留まれかしと
 天にあをのき地に伏して「歎かせ給ふぞ
 哀れなる」割府の御所は寺々の「鐘の響
 も留りて長夜の響と泣暮す是は扱置爰に
 又肥前に於てつれなき士隈部添島鍋島田
 尻の人々は此序に赤星か領分を知行にせ
 んと我が手三千餘騎を引具して割府の御
 所を指して急がる頓て割府にも成ぬれ
 ば彼御所を二重三重に取圍み時の聲をぞ
 揚にける赤星は此由御覽なされ扱は中々
 兄妹の小供を無慘に殺され歎かせ給ふ折
 節敵に攻められて「太刀も揚らぬ次第也
 もふは力に及はず彼御所に火を掛天も霞
 と焼立る住馴れし割府の御所を袖白雪と
 振捨て八代さして落んとし給ふ所を跡よ
 り敵は鬨の聲を揚げしげくしとふて追ひ

懸る是は扱置爰に又赤星の郎等に上村兵部左衛門進大剛の勇士あり此由見るより主を討せて叶ふまじと我が手三百餘騎にて門外さして切て出れば肥前方大勢にをろし合せ如何に旁々某を如何なる者やとや思らん赤星が郎等上村兵郎左衛門とは某也手並の程を人々見給へと言ふより早く三尺八寸の大太刀を抜持て大勢の中に面も振らぬず割入る追つ追れつ請つ流しつ三度の太刀打四度の追ひ込み五度の戦六度の合戦七八度目には鎬を削り鏑を割り切羽の金もみちに成れと世にも烈しく爰を先度と戦ひしが痛はしや向ふ敵八百餘騎は只やみくくと討れける我が手も三百餘騎はつまりく討死す今一太刀とは思へ共多勢に無勢の事なれば

方に及ばず少高き所に走上り腹十文字にかき破り清く自害をしたりける未だ惜かる年は二十八惜まん人こそなかりければ赤星殿は此隙に八代さして落給ふ八代の慈眼寺正法寺彼の兩寺を深く頼ませ給ひて「三年せの程は終夜」百萬遍を唱へて月日を送りておはします

(古) 一段

去程に斯て三年も過行けば赤星殿は徳の口より夜船に召れ「薩摩を頼みに下らせ給ふ」順風よければ帆を揚て程なく「出水米の津に著かせ給ふ其頃の米津は島津義虎公の御持なれば直に義虎公の御前に参り如何に申さぬ某は肥後に於て割府の城主赤星源次綱明と申者也肥前に於てつれなき士隈部左馬之介親興と云へる者の

讒言に依り隆信殿より兄弟の子供を無慘
 に殺され其上敵に責られて未だ太刀も
 上らぬ次第なり漸々是迄参り候也何卒肥
 前に一度弓を引て給はれ義虎様と有けれ
 ば義虎公聞召れ扱は中々世にも無慘の事
 を聞く次第かな其儀ならば是より北に當
 りて大口と云へる在所に新納武藏守忠元
 逆弓取一人おはします彼を深く頼ませ給
 へと案内者二人連れ給ひ早や米の津を
 御立なされ夫婦打連れ面は月日に晒され
 て裾は露袖は涙に打しめりつくくと吳
 竹の世は逆様に杖をつき嗚呼兄妹の子供
 の事がいや増さる音に聞えし高はな越を
 軽く召れ急かせ給へば程もなく菱刈表
 大口に成りぬれば直に新納武藏守殿へ對
 面有て斯なる次第を申させ給ひければ武

藏殿聞召れ儲は中々無慘な事を聞く次第
 かな其儀ならば是より東に當りて佐土原
 と云へる所に島津中務太輔家久公逆軍奉
 行のをはします彼を深く御頼み成され
 左もあらば數ならぬ武藏も島津の御馬の
 先にまかり立ん案内者二人召連れ早大口
 を御立なされ音に聞えし般若寺越を軽く
 召れ眞崎五ヶ所を打通り白鳥山を伏拜み
 野尻紙屋を打過て急がせ給へば程もなく
 日州佐土原に著かせ給ふ直に中務殿の
 御前に参り赤星が斯の次第を殘らず申
 させ給ひ何卒肥前に弓を引て給はれ中務
 様と涙と俱に頼みたれば中務公此由聞召
 れ是は以の外の仰かな當國は赤星殿とは
 矢崎合戦の折大敵肥前は味方也其儀無
 用と仰せける赤星は是非に及ばず涙と共

に中務殿の御前を立せ給ふ「爰に又中務殿の御嫡子に」又七殿迎今年十三歳に成らせ給ふが赤星を哀れと思召直に父中務殿の御前に参りいかに申さん父上様國主が國主を頼むは世にある習ひ譬へ大敵也迎も人窮すれば本に歸る鳥窮すれば懐に入るとかや夫れ武士の習ひにて昨日の敵も今日は味方今日の味方も明日は敵何卒御加勢有て給れかし左もあらば某も御供仕り御馬の先にて高名致さんと勇み進んで有ければ中務殿聞召れ又七殿の勇氣を感じ其儀ならば赤星を呼返し給へ赤星は斜に悦び直に中務殿の御前に参られける頓て中務殿御定にいかに申さん赤星殿當國は島津義久の領地なれば某迎も議定返事は致されぬ兎にも角にも義久公に

御意を伺ひ弓を引かでは叶ふまじと有ければ悦び給ふ事限りなし夫より佐土原小路く島原責と觸れ廻せば我れもくと進む士七百餘騎とぞ聞えける嫡子又七殿三百餘騎御父子共に一千餘騎にて早佐土原を御立なされ「急がせ給へば」世は何事も勝目の坂を打過ぎて早や高岡を馳通り去川に成ぬれば死出三途の川と打渡り今日もまだ日は高城と打通り最早庄内都の城に著かせ給ひ竹の下なる一夜の笹陣召れける直に其夜は北郷一雲殿へ御内談召れしが心得たりと觸狀を廻され給へば先一番に小杉士持北郷民部左衛門を初めとし都合其勢一千餘騎にて早や都の城を未だ夜深くも御立なされ元服の渡り三重町過給ひ眞幸の峰を越え人の中成る

本路原六道坂をも打過て心安くも通り山
 牧の原をも下らせ給へば「早や福山の宮
 が浦にぞ著かせ給ふ」直に宮が浦々に
 兵船二十餘艘を催し宮が浦より御舟に召
 れ先一番に弓手に見えしは櫻島妻手に見
 えしは源氏の内神正八幡を伏拜み捨て置
 かれん濱の市「七里小濱や長濱の」加治
 木の里を詠れば實にや名高き蛇王嶽龍は
 住ねど黒川や爰は協元別府川や龍が水を
 も跡に見て三船の明神伏拜み暫しは爰
 に浮び船浦吹風に帆を揚て順風よければ
 早「鹿兒島の春日の町に著かせ給ふ」中
 務殿は直に屋形に参り「赤星が斯の次第
 を御申あれば義久公聞召れ儲は中々赤星
 は弓矢に取りては大敵成れ共國主が國に
 落ちて主を頼むは世に有る習ひ兎にも

角にも弓を引かではふまじ去れど又軍
 は勢の多少によらず大將の運に寄るべし
 此度の大將島津中務父子と御意下る中務
 殿は直に御前を罷り出鹿兒島小路く
 に肥前島原責と觸れを廻され給へば我も
 くと進む士先一番に島津中務殿御父子
 同名輝久北郷樺山鎌田寛政新納忠元伊集
 院久治吉利吉田加治木彈正頼姓佐多島津
 圖書頭忠長禰寢重武喜入肝付入來院桂梅
 北敷根比志島弟子丸宮里野村の何某町田
 出羽守中にも川田駿河守川上左京久堅稻
 留左京猿渡右京出水方には島津義虎公同
 名伯耆守水谷植村大橋平田和州村田狩野
 介彼の方くを「先として都合其勢一万
 三千餘騎は」唯やみくと馳集り吉日を
 撰はれ鹿兒島を御立成され旗差物を「朝

日に輝し勇々敷ぞ見えにける」鶴丸山を
 後に見て」音に聞えし水上坂を軽く召れ
 腰は掛ねど横井原間遙かの五本松君の心
 は實に清藤凍み松伊集院六郎坂をも打過
 て城はなけれど城の町急がせ給へば程も
 なく「市來の港に着かせ給ふ」一夜の宿陣
 召れける」大隅薩摩は遠國成れば肥後に
 合する旗か二十四本と聞へける明けし
 かば市來の港を御立なされ世に何事も勝
 目の橋をも打渡り華の五反田打過て薩摩
 山を二度と歸らぬ死出の山と打通り佛の
 前には有らぬ共佛生橋をも打過て敵に
 向田川内川を三途の大川と打渡り新田
 八幡宮へ御參詣成され此度貪慾無道の隆
 信を何卒討せ給はれと深く御祈願召れけ
 る早や川内を御立なされ夕日に向ふ暮橋

や五月半の麥の浦高城の小路を打過て
 西方阿久根を馳通り急がせ給へば「程も
 なく出水青屋に著かせ給ふ」義虎公の旗
 揃へ米の津へ三日か間は軍の評議召れけ
 る斯て三日も過行けは家久公の御馬は徳
 の口へぞ廻さるゝ兵船三百餘艘を一ツに
 押寄せ矢筈か嶽より吹下ろす嵐と共に船
 を漕出す名所舊跡浦々を詠めて面白や
 先一番に夕部生れて今朝早見えでし物は
 はらび島君の御運は強き命長島や敵の爲
 には獅子の島瀬崎笠山三日月山をも跡に
 見て駒は立ねど牧の島寝亂れ髪のかつら
 崎笛と太鼓はなけれ共神樂崎をも漕通り
 君はなけれど御所の浦時に渡せば今浦本
 浦唐木崎境ひ二又うろを崎柳の瀬戸も後
 に見て今日の日も早や暮羽鳥一夜の宿を

からふ島夜はほのくくとあこふ崎駕は住
 ねど池の浦名残惜しくも姫の浦三角の
 瀬戸を漕ぎ出で見れば早や先手は島原の
 「安徳寺に陣を取り」是は楮置爰に又
 鎌田寛政新納忠元吉利吉田彼の人々は薩
 摩に於て物に馴れたる武士なれば天草
 島に打渡り島衆五六人からめ取り案内者
 として島原陣にぞ渡さるゝ中務殿は此
 由聞召れ大いに悦び最早軍の手當召れけ
 る先一番に鎌田寛政新納忠元伊集院久治
 吉利吉田彼の人々は一千五百餘騎にて濱
 の出口の手當らり稻留左京猿渡肥前守一
 千五百餘騎にて水の出口の手當なり加治
 木彈正三千餘騎にて大手の口に扣へ給ふ
 島津中務殿御父子川上左京久堅彼の人々
 は二千餘騎にて桑原の陣に籠り給ふ平田

和州村田狩野介は殘の勢を「引列れて島
 原口を相堅め」肥前方より寄せ來る敵を
 今や遅しと待ち給ふ

(古)二段

去程に薩摩方は思ひくくに陣所を構へ龍
 造寺山城守隆信方へ使者を立「案内乞ふ
 て内に入り」此由斯と告ければ「薩摩軍
 衆が寄せて有るならば大軍をし催唯安々
 打亡さんと早や六ヶ國に觸ければ我も
 くくと進む士先一番に隈部左馬之介鍋島
 丹州添島右衛門田民某寺山陸奥守野口能
 登守圓城寺美濃守成松遠江守一族には小
 川武藏守小宮源左衛門後藤家持龍造寺家
 種此人々を初として都合其勢六万七千餘
 騎は時刻を移さず寄せ來る龍造寺山城守
 隆信を大將として九十三本の旗を靡かせ

「島原に渡らるゝ」頓て肥前軍衆は「薩摩方を一目見て偕は中々此度の合戦は案に違はぬ小勢かないら高珠子には有らね共手の内にて揉まんと勢ひ荒鷹の小鳥をねらふて勇むが如く也薩摩方に於て鳥津中務殿之を御覽なされいかに旁々あれを見よ此度の合戦物に譬へて見れば籠の内の鳥網代に籠る魚とかや前には大敵後ろは大海左右は巖石に圍まれて洩れて行く様は更になし去れど又中務殿は智慧第一の名將成れば二心つかはん其爲に三百餘艘の兵船は皆島原の高濱に引揚げ悉く焼捨る頓て陣屋くに觸れ廻し此度の合戦薩摩に二度歸るとは思ふなよ皆島原の士と成むと定めよと向ふ先は面も振らず切て通れと諸軍勢に下知をなし明れば水

無月十八日と申すにまだ東雲計りに肥前方總陣一度に鬨の聲を啜と揚げ野口の陣に押寄する先手の大將隈部左馬之助親興と名乗二千餘騎にて大手の口に押寄する薩摩方先手の大將稻留左京猿渡肥前守一千騎を引て肥前方大勢の中に真地に切て入り追つ追はれつ請けつ流しつ三度の太刀打四度の追込五度の戦ひ六度の合戦七八度目には鎬を削り鏑を割り切羽の金も未塵に成れと世にも烈しく爰を先度と戦ひしが隈部左馬之介を「初め向ふ敵一千餘騎は討取たり」去れど又稻留左京猿渡右京其外三百餘騎はつまりくに討死す未だ惜しかる稻留は二十六猿渡三十一と聞えける爰に又川田駿河守は兼て傳へし兵道者なれば清水谷に下り夜の間に

七度の水をかゝり天に向て秘法を行ひ給へば源氏の氏神正八幡諏訪稻荷祇園春日の五社の神より此度の合戦は肥前は亡び薩摩は勝軍に疑なしと御詫宣あれば中務殿此由聞し召れ斜に悦び最早此由陣屋に觸れさせ給へば是の勢に島津主右衛門尉輝久は一千餘騎を引て野首の陣より一つ具を相圖として切て出れば肥前方小川武藏守が大勢におろし合せ爰を先度と戦ひしが向ふ敵一千餘騎は打取陣所さして引て行く其勢に加治木彈正は三千餘騎にて大手の口より切て出れ肥前方寺山陸奥守が勢におろし合せ大勢の中に割て入り群がる敵を弓手妻手に打捨當るを幸ひ其處引なと言ふ儘に爰を先度と戦ひ給へば又も向ふ敵二千五百餘騎は打取り

「陣所をさして引退く」爰に又平田和州村田狩野介二千五百餘騎引て島原口より討て出て肥前方繩口の大勢におろし合せ面も振らず火花を散して戦ひしが「又も向ふ敵一千餘騎は討取」陣所さして急ぎ行是は扱置爰に又島津中務殿は軍は今が時分と心得て嫡子又七殿を御側に召れいかに又七唐土の虎は一日に千里を馳せて駆け戻り一身を捨て、毛を惜むとあり夫日本の武士は幼き時より武藝を盡し名を末代に残し置人は一代名は末代と申す必ず跡に残りて未練致すな名字の恥辱家の恥と云ふより早く東の方山の手口に馳廻り肥前方大勢の中に横合より打て掛れと給へば頓て大音揚ていかに旁々某を如何なる者とや思ふらん薩摩に於て島津

又七とは某也手並の程を手本にせよと云ふより早く二尺八寸の大太刀を抜持て大勢の中に割て入り眞向立割車切當るを幸ひ其處を打なと言儘に追つ捲りつ受つ流しつ西より東蜘蛛搔手十文字八ッ華形と言儘に縦横無盡に切立れば四方にさつと小路を明け又も向ふ敵三千五百餘騎は討取て陣所さして引退き是は扱置爰に又川上左京久堅は軍は今が華と心得て我手三百餘騎を相構へ桑原の陣に扣へけるが竊に寺山が死したる旗を奪ひ取り肥前軍衆に様を替へ敵陣の中をあなた此方と廻られ給ふが鍋島に行逢ひいかに鍋島殿某は士の未練ながら只今中務殿の横入に目かくれて我君隆信公の御旗本を儲と忘れ候ひしが教へ給へと涙と共に申

ければ鍋島の運や盡きにけん太荒敵を味方の勢と心得て我君隆信公は彼方に見へし小松原を北に廻り本丸の陣へ三十六騎を御側に召れ床机に腰を掛け母衣掛武者にておはします急ぎ参られよと教へける左京斜に悦び鍋島が教の通り本丸の陣にせめ登りもふは手の内と心得て其日の装束を改め「いかに申さぬ隆信殿」某を如何なる者と思ふらん薩摩に於て島津義久の郎等川上左京久堅とは某也此度赤星が兄弟の爲川上か恨の太刀を請て見給へと大音揚て申ける隆信殿は大に驚き扱は中々川上は薩摩に於て家ある武士か又は家なき武士ならば日下に廻れと有ければ川上はからくと打笑ひ儲は中々思ひも寄らぬ仰かな士が士を討に日下日表の

差別なしと言儘に三尺八寸の大太刀を拔
 持て隆信の弓手の袈裟掛水もたまらず打
 落す御側の士三十六騎は此由見るより
 主を討せて叶ふまじと切て掛れば川上殿
 は隆信を討たる勢ひに世にも烈しく爰を
 先途と戦へば「痛はしや三十六騎も一ツ
 枕に只やみく」と討伏る」隆信の年を申
 せば五十一頓て隆信の首を太刀の先に貫
 きて小松原の本陣を心静かに引て行く頓
 て小松原にも成ぬれば鍋島丹州添島右
 衛門彼兩大將の者共此由を一目見るより
 儲は中々あれを見よ薩摩軍衆が何時の間
 に奥の陣にもれたかな主は討れ手勢は持
 たず我が君の敵何國まで落行ぞ逃すまじ
 と言ふより早く切て掛れば川上殿心得た
 りと言儘に向ふたる先は只一筋に切て通

れと士卒に下知をなし寄せ来る敵は群つ
 て追つまくりつ受つ流しつ爰を先途と戦
 へば向ふ敵數多討取「仕すましたりと味
 方の陣に引て行く」頓て隆信の印を實檢
 に備へければ中務殿心得たりと小高き所
 に馳上り「大音揚て肥前の大將龍造寺山
 城守隆信を川上左京久堅が打取たりと呼
 ばひて「勝鬨を三度堂と揚げ給へば薩摩
 軍衆は是を襲ひ三ヶ國の勢は一手に成り
 て肥前方落行勢に掛合せ弓鐵砲を放ち掛
 呼き叫んで戦いければ痛はしや肥前軍衆
 は「秋の田の水にはあらね共つまりく
 に切て落さるゝ者は數知れず」斯る所に
 島津又七殿は鍋島が落行所を目に掛駒を
 早めていかに申さん鍋島殿何國迄落給ふ
 ぞ斯く申す某は薩摩に於て島津家久が嫡

子島津又七とは某也。今年歳は十三歳軍は今日が初め也。此度の合戦に討死致す者也。我を打取て高名せよと大音揚て呼ばひければ鍋島も落行駒の手綱を引返し、「大將は打れ手勢はなく何の力で軍致さんと」馬より飛び下り甲を抜で「降参する社哀れなれ」又七殿思召降参したる士を討て捨てはいかせんといかに申さん鍋島殿島津の家を如何なる者とや思ふらん忝くも清和天皇の御末なけれ島津方に二度弓を引く事無益なり此度の合戦は赤星が敵軍の事なければ國取る迄は及ぶまじ肥前の城は御邊に預け置とぞ仰ける鍋島は大に喜び三度禮して御前を下り肥前をさしてぞ急がる、其後中務殿は打死したる首積を召れける肥前方には龍造寺山城守隆

信を初めとし士大將百三十五人其外總勢一萬千百餘騎とぞ聞えける薩摩方には稻留猿渡を始として上下共に八百餘人扱も打死せし隆信の首を實檢に備へければ頓て隆信の印を太刀の先に貫き小高き所に差揚て島津屋形を軍神摩利支尊天と伏し拜み誠に島津方は今生後生忘れ難しと悦給ふ事限りなし「爰に又八代御前は「此印を見給ひて兄弟の子供の事が彌増る迎鳥丸にて蹴上げ蹴下し七度か間氣色をなして八度目に納め置川上は此由見るより大に腹を立て士が太刀の先にて討取たる印を女の手足に掛てはいかせん」と有ければ又七殿進み出申されけるはいかに申さん川上殿古へより女童と言傳への有るが誠也との給ひて様々川上の心を取直し

給ひけん其年の年號申せば天正十二年甲申頃は三月十四日也其日の支干は辛の卯源氏の氏神正八幡の御縁日世の中は何と聞ても唱へても「浮は世の中つらきは隆信きをひは薩摩方」物の哀れを留めしは赤星が兄弟の子供にて諸事の哀れを留めけり

(古)木崎原合戦

(初段)

情く世間の現象観するに積善の家には餘慶あり積悪の家には餘殃あり」最慎むべきは此道也」爰に薩隅日三州の太守島津修理太夫義久と申し奉るは「恭も清和天皇の御苗裔鎌倉右大將征夷大將軍源頼朝公の御子左衛門尉忠久公より十六代目の御嫡孫也文武二道の名將にて上を敬ひ下を撫て仁義正しくましますせば靡か

ん草木はなかりけり御舍弟には兵庫頭忠平公左衛門尉歳久公中務太輔家久公逆何れも文武の名將也其外家の子郎等に至る迄皆忠勤を勵ませば古今稀なる御果報と近國他國の者迄も羨まざらんはなかりけり是は扱置爰に又「大職官の御末に」伊豆の國の住人伊東入道若心が末孫に伊東左京義祐逆弓取一人おはしました其比日向國都の郡に住ふ其心飽迄不敵にして仁義の道を學ばず上を敬ひ下を憐む心なく我意に任せて舉動へば恐れぬ者こそなかりけれ去れば古人の言葉にも君臣を見る事手足の如くする時は君臣を見る事服心の如くす又君臣を見る事土芥の如くする時は君臣を見る事唯寇讎の如くす又曰く義に従ふ時は賢也諫に従ふ時は聖也然る

に義祐道を違ひし有様を譜代好みの家臣
 共諫言すと雖も用ゆる心なく却て疎み遠
 ざけらる「心の内こそ淺ましけれ」大欲心
 の餘りにや」大隅薩摩に發向し」我れ三
 ケ國の主と成て子孫榮華に盛んと明暮便
 を廻らせ共飲野の城には兵庫頭忠平公
 智仁勇の三徳を兼備へ給へば小勢を以て
 叶ふべき様は更になし去れば珠摩の城主
 相良に加勢を乞はんと家の子に伊東加賀
 守祐安と申者あり是を近付け事の様子を
 言含め相良方へぞ遣しける頓て珠摩にも
 成ぬれば案内を乞て内に入り直に相良に
 對面し事の仔細を聞く上は必ず御加勢申
 さんと左も潔き返答す先首途を祝はんと
 酒を様々進めつゝ約束違はん其爲に小金
 作の太刀一振加賀守へぞ引へける祐安悦

喜限りなく約束堅く「相極め日向を差し
 てぞ歸りける」義祐此由を聞召し斜に悦
 び家の子郎等相集め内議評定取々也爰に
 野尻の城主に福永丹波守祐友といふ者あ
 り仁義を守る勇士にて少も憚る所なく進
 み出申様誠に愚案を廻らし候に島津殿と
 申すは恭くも清和天皇の御末多田の満仲
 より以來弓箭の家に譽れを取り政道堅く
 し給へば御家の家臣に至る迄數代の好
 みを忘るゝ者逆は聞ざる所也皆忠勤を勵
 ませば心を變ずる者逆は稀にも聞ざる所
 なり是は強敵の大敵也御當家の兵と申す
 は譜代の士少くして皆方々の假武者なり
 殊に相良の何某は一皮心の表裏人と承
 れば無二の味方とは言ひ難し小勢を以て
 大敵の國へ入り働き給はん事譬へば襠螂

の斧を以て龍車に向ふが如くなり是は又
 事新しく申す事にては候得共御先祖祐高
 公は島津久豊を御聲に取給ひ其威光を
 以て日向國十一ヶ所を打平げ個様に榮華
 に榮え給ふも是偏に島津殿の御恩なり
 恩を得て恩を知らぬは木石に相同し左
 そ佛神三寶も悪しと思召さるべし先我々
 共が所存には島津殿の御旗下に成らせ給
 ひ先陣の御働き忠義を盡させ給ひなば九
 州残らず島津殿の御手に入るべし其時こ
 そ二ヶ國も三ヶ國をも島津殿より給は
 るべし然あらん時は御家長久御子孫繁昌
 たるべき事何の疑ひか候べき先此度の御
 合戦は思召留り給へ平にくと理を盡し
 て諫めける義祐素より無道人以外の腹
 を立て今に始めん福永が賢人達の可笑さ

よ理非は兎もあれ角もあれ珠摩に約束す
 る上は早打立て者共と周章ふためき勢揃
 へ先一番に伊東加賀守祐安同く新三郎祐
 信を兩大將として七百餘騎を差遣し頓て
 福永を前に召れいかに福永弓矢の家に生
 れ来て臆病未練の舉動かな我に二度對面
 「無用と言ひ捨て」我が身も二千餘騎を
 引具して二陣に續きて出給ふ天理に背く
 此合戦「危しと言ん者こそなかりけれ」
 兎にも角にも義祐の心の内こそ淺間しけ
 れ

(古)二段

去程に飯野にまします兵庫頭忠平公は智
 惠第一の大將なれば兼てより伊東方へ
 「忍ひの者を入れ置給ふ故」此事早く聞
 召れ方々の味方くへ飛脚を越して告給

ふ先一番に菱刈表の軍兵共勇み進んで馳集り忠平公を始め川上三河守忠智同助七忠賢上原長門守山田新助同名彌九郎村尾源左衛門尉五代勝左衛門比志島紀伊守喜入攝津守黒木播磨を先として倔強の兵者共三千餘人を相勝り木崎原の關所へに伏せ置伊東勢を菱刈表へ遣り過し跡を取切て皆悉く打亡さんと待せ給ふ是を知らで伊東勢早や加久藤迄は發向す菱刈表の兵者共願ふ所の幸と五拾騎百騎は爰の峰彼所の谷のつまりへに馳集り時の聲を揚げ弓鐵砲を放ち掛おめき叫んで戦ひける「伊東方は小勢なれば」珠摩の加勢を今やくと待けれど相良何とか思ひけん一騎も勢を出さねば前後の敵に取圍まれて十方に暮て居たりける斯る所に伊東

加賀守の郎等に柚木崎丹後守政家と申す者あり文武二道の勇士にて黒革威の鎧着て五枚甲の緒をぬめ白檀磨きの脛當に兵庫鎖の籠手をぬき三十六指たる大中黒の征矢を負ひ五人張の塗込籐の弓を持ち鹿毛なる馬に乗りたりしが進み出て申す様誠に人の心と川の瀬は一夜に替る習ひにて覺悟の前にて候得ば今更驚くべき様は更になし斯る時命を惜み生んとすれば必ず死す唯一筋に思ひ切一方を打破り通るべしと諸軍勢に下知をなし小林さして引て行後れ軍の習ひにて我れ先にと足を亂して落ければ跡より敵は群がつて時の聲を造り掛け繁くしとふて追懸る丹後守之を見て斯ては叶ふべからず某一人跡に蹈留りて防ぎ矢を射て味方を落さんと

「後陣遙かに引さがり」爰に控へし兵は

伊東の郎等柚木崎丹後守政家と申す也

近國にも隠れなき強弓の精兵矢次早の手

利也日頃音にも聞きつらん今は能く見よ

汝等共矢先に敵は嫌ふまじと五人張に十

五束引絞り差取引結射る程に矢面に進む

兵者共生死は知らず「二十八騎は射て落

す」此勢に恐れをなして勝に乗たる島津

方の大勢しどろに成て暫しが程は進み得

ず其隙に伊東勢漸々引て行程に木崎原に

も成ぬれば忠平公の御勢此由見よりも伊

東勢は一騎も残なす討取れと時の聲を堂

と揚げおめき叫んで戦ひける伊東勢も爰

を破られては叶ふまじと面も振らず遮る

敵を弓手妻手に打伏せ切先より火花を散

して鎬を削り鏑を割り切羽の金も未塵に

成れと爰を先途と責戦ふ未だ勝負も見え

ざるに島津方より川上三河守朝同助七忠

賢上原長門守を先として物に馴れたる倔

強の兵五百餘人を相勝り兎有る木蔭を馳

せ廻り義祐の旗下に幕地に切て入り縦横

無盡に切立れば「思ひも寄らぬ伊東勢風

に木の葉の散る如く」四方にさつと散に

ける島津方大勢前後より引包み追伏せ

く討程に時を移さず伊藤方名有る士伊

藤宗右衛門伊東權之助落合源左衛門尉佐

土原四郎兵衛を先として五百餘人は悉く

名乗て打死す其外敵兵共此所や彼所のつ

まりくに追詰られて討るゝ者は數知れ

ず斯る所に伊東加賀守祐安は落る味方の

勢に押立られて心ならずも五町計りは落

たりしが兎有る高見に馳上り臆病至極の

奴原共何國まで落行ぞ返せ戻せと味方の
 兵を大音揚て呼はれど引立たれたる勢の
 事なれば耳にも更に聞入れず我れ先にと
 小林さして引て行く祐安心に思ふ様我れ
 賤しくも伊東殿の家の子と生れ此度先陣
 の大將を承り未だ一軍の利も得ず何の面
 目ありて古郷へ歸り人々に對面せんいざ
 打死せんと駒の手綱を引返し大音揚て名
 乗様茲に扣へし兵は伊東の家の子に伊東
 加賀守祐安と申す者也君恩を報せん其爲
 に唯今打死致す也我れと思はん者あらば
 懸れくと呼はりける島津方に於て澁谷
 上總守國重此言葉を聞より嗚呼優しくも
 返させ給ふ者かな我れ社古へ北原が郎等
 澁谷上總守國重と申す者也日頃音にも聞
 つらんと言儘に馬より飛下りて互に打物

拔持て追つまくりつ火華を散して戦ひけ
 る未だ勝負も見えざるに國重いざ組んと
 討物投捨懸寄るを祐安共に討物投捨心能
 くむすと組國重危く見得ければ國重が郎
 等二人之を見て主を打せては叶ふまじと
 弓手妻手よりむすと組上を下へと返しけ
 る祐安素より大力なれば物の數共思はず
 彼二人の者共を搔摑み此所彼所へかつば
 と投捨國重を心安く取て押へ已に首を搔
 んとする所に國重が弟軍八國直兄を打せ
 ては叶ふまじと落重り祐安が草摺をたゝ
 み上げ柄も拳も通れくくと三刀刺てよ
 はる所をはぬ返し終に祐安が首を打落
 す仕濟したりと言儘に凱歌どつと揚げ
 「陣所をさして引て行く」痛はしや祐安
 が歳を積れば未だ惜しかる三十一其年の

年號申せは元龜三年壬申正月四日也國重
弟兄の手柄の「程は天晴勇士やと」皆一
同に感^じける

(古)二段

去程に加賀守が郎等一人打漏されて新三
郎に追付個様くと告ければ「新三郎之
を聞き」儲は中々祐安殿打死とかや兩大
將の者共が一人は打れ一人歸りて如何せ
んいざ打死せんと附從ふ者共一人も殘ら
ず落行て義祐殿の御先途を見るべし暇取
らする是迄なりと言捨て駒の手綱を引返
し島津方大勢の中へ割て入り面も振らず
火華を散し戦ひしが向ふ敵七八騎を討取
我身も數ヶ所の疵を蒙り今は是迄なりと
思ひ切より飛下り自害せんとする所に敵
の兵透間もなく馳來り祐信心得たりと言

儘に眞先に進む兵共諸膝雞ぎて切伏る二
番に續く兵と引組て差違へ「共に空敷成
にける」痛しや祐信が歳を積れば未だ
惜かる年は生年十七歳天晴勇士の兵者か
なと「惜まぬ人こそなかりける」爰に又
柚木崎丹後守政家は「一人踏止り是は義
祐の郎等に柚木崎丹後守政家と申す者也
忠平公の御内に名ある士候は、申上度仔
細ありと大音揚て呼はれど勝に乗たる雜
兵共耳にも更に聞入れず我先に打取らんと
遮るを丹後守此由見るより理非をも知
らぬ奴原共其所立退けと言儘に遮る敵を
弓手妻手に切て捨忠平公の旗本に眞一
文字に駆け來る忠平公此由御覽じて「是
は伊東に於ても名有る士と聞く」仔細を
問へとの給へは旗本の兵者共丹後守を中

に取圍み丹後守は馬より飛下り打物彼所へ投げ捨いかにかに方々鳴を静めて聞給へ我等が主の義祐は島津殿の御恩を蒙り子孫榮華に榮えし人なりしが斯る逆心を企て天理に背き申さる、故今度の合戦は皆悉く敗軍す家の滅亡遠からず我々共も島津殿に降參申上度候得共忠臣は二君に仕へずと本文の言葉に恥ぢ唯今爰にて打死致す也茲に幼少の一子を忠平公に頼み奉る哀れ貴きも賤きも子を思ふ道に迷ふとは今こそ思ひ知られけれ此事申さん其爲に是迄參り候也早首を召れ候へと甲を脱で彼所へ捨てもしんてぞ居たりしが忠平公此由聞召れ一子の事は扱置汝も降參仕れ平に〜との給へばこは難有き御詫かな左あらは御暇申さんと腰の差添引拔

き笛の鎖をかきはなし朝の露と消えにけり大將初め見る人聞く人「鎧の袖を濡しける」斯様〜に打死し彼方此方に時刻を移す其隙に大將の義祐は虎口を逃れ漸々都の郡に落たりしが島津方の兵共我れ先にと追掛る忠平公此由御覽なされ勝に乗り長追しては悪かるべし先引取れや者共と諸軍勢に下知をなして引給ふ忠平公は伊東勢に打勝て飯野の城に引返し定めて義祐今度の恥を雲がんと二度打て出るべし油断するなどの給ひて遠見を出し忍びを入れ置御用心は隙もなく茲に川上三河守上原長門守を初として家老の面々申す様臆病神の附果たる伊東勢何程の事か仕出すべき此勢に境目を打越し御働さ候は、手に立者は候まじと勇み進んで申

上れば忠平公此由聞召れ此儀尤も去ながら黄犬却て虎を噛む窮鼠却て猫を噛むと言ふ事あり伊東も名ある大將悔りては悪かるべし假令亡ぶ共味方の大勢損るべし時節を待てとの給ひて「境目堅く打守り月日を送りておはします」是は扱置伊東入道義祐は「今度木崎原の合戦に家の子郎等残り少く打なされ無念至極はなかりける今一度境目を打越え余多の城を攻落し會稽の耻を雪がんと明暮手便を廻らせ共臆病神に誘はれて妻子を匿し落支度をぞしたりける茲に野尻の城主に福永丹波守祐友は此由を聞き伊東殿の御家滅亡すべき時節は此時也我度々諫言しけるに忠言耳に逆ひ却て不興を蒙り此三年せが程は對面なし我れ賤くも人界に生を得忠

臣の義を盡し君を諫むる甲斐もなし無念至極に思へ共是も譜代の主君なれば恨みる所は更になし傳へ聞けば伊東殿未だ前非を悔ひ給はず再び薩摩に發向せんとの企て有るよし君辱しめらるゝ時は臣以て死すと言ふ事あり我れ家臣の身として今一度諫めざらんも耻辱の至りなるべしと一通の諫言狀を認めて態と名字は書ざりしが夜半にまぎれて忍び入り伊東殿の門前に立置て「宿所をさして歸りける」兎にも角にも福永が所存の程こそ天晴剛の勇士かなと皆一同に感じける

(新)鎌倉之宮(初段)

山の端出づる秋月も浮雲の爲めには其光を失ひ籬に匂ふ蕙蘭も狂風の爲めには「其香を敗らるゝ習あり」建武中興の大

業も」足利兄弟の叛逆によりて成就せざりしこそ實に千載の遺憾なれ扱も足利尊氏は護良親王の英資を忌みそをなきものにせんとしてや繼母准后に旨を含め親王不覬を圖るとそ密に奏聞せしめける帝逆鱗ましまして宮を流罪に處すべしと中殿の御會にことよせてそれとはなしに招きよせ馬場の御殿に幽囚の身となすこそ墓なけれ蜘蛛手結ひたる一間の中泪の床に起さふし給ひ如何なれば我身元弘の始めには武家の爲めに身を隠し木の下又は岩が根に露しく袖をほしかね歸給ひ昨日今日讒言聰明を蔽ひ奉り縲洩の辱めを受くるやらんと知らぬ前世の報い迄殘すばなく思召し虚名空しく立たずと聞け方若の御心解給ふ時もやあらんと頼まれぬ頼み

を仇に頼むこそ世にも悲しき極みなれさる程に公議遠流ときまよりしかば宮は御悲に堪へず心の丈けを認めて心よせたる女房をして急ぎ帝に奏聞せしめぬ其文に申さる様

往に承久の昔より朝廷の政權武門に移り專横殊に甚しかりければ護良不肖の身を以て慈悲忍辱の法衣を解き怨敵降伏の堅甲を著け君の爲めには身を忘れ敵に向ふて死を恐れず晝は終日深山幽谷の中に臥して岩上の苔を衾とし夜は通宵荒村遠里に出て、野路の霜を踏み碎き龍の鬚を撫て、は魂を消し虎の尾を踏みては胸を冷せしこと數知れず元凶終に誅せられ龍駕都に立還り王政維新の世となりしは御運の強き爲めとは

いへど又護良の忠功も與りてこそあり
 つらめ中興の帝業尙未だ一簣の功を
 缺く際に讒誣忽ち聰明を蔽ひ罪責委く
 護良が身に集るゝこそ無念なれ仰て天
 に訴ふれば月日不孝の子を照さず俯て
 地に寄すれば山川無禮の臣を載せず天
 地神明共に棄て父子の情縁も絶果てぬ
 四方の國邊は廣くとも身を容るべき場
 所もなし申生死して晋國亂れ扶蘇刑せ
 られて秦世傾くところ聞きつれ古き例
 しを鑒みて今日より後を推しはかり
 護良が竹の園生の名を削り桑の門邊の
 身とならしめ給へ

とぞ書きつけゝる此文若しも上聞に達せ
 しならば父子の情御宵めの御沙汰もあり
 けんものを心なき傳奏共は諸の怒りを恐
 れて中間に止め置きしぞ是非もなき同じ
 宮中にありがら上天所を隔絶し訴願更に
 啓けずして五月三日といふ日には惡逆無
 道の直義が手に渡されしぞ無慘なる直義
 は五百餘騎の兵をもて路次を嚴しく警衛
 し鎌倉に連れまつり二階堂の土窟にぞ深
 くも押籠め參せける南の方と申しつる上
 臍一人より外は附そふ人も荒蕪日光さ
 へも見 わかぬ世も常闇の室の内よこぎ
 る雨に御袖濡し岩の雫に御枕をも乾かし
 かねてぞ「六月許り過こし給ひし」御心
 の中こそ實にも哀れなれ

(新) 一段

去る程に直義は山の内を過ぐる時淵邊伊
 賀を近づけて「密かに語り出づる様」世
 は足利となりつべき時も遠くはあらざれ

ど當家の爲に行末の讎となるべき其ものは護良親王にておはすなり宮を死刑に行へと朝廷よりの御許しは未だ御受け致さねど好機兎角に逸し易し御身は急ぎ二階堂の谷に参りて彼の宮をなきものにてせよと下知すれば淵邊委細承り土窟指して急ぎける宮は此時常闇の夜の如くなる土牢の中に夜の明も知らせ給はず猶燈を挑げつゝ御經遊ばしてぞおはしける淵邊御輿を庭に据ゑ御迎に参りつる由申し、に宮は之を御覽して汝こそ我を失はん爲めの使者ならめ心得たりと立ち上り淵邊が太刀を奪はんと走りかゝらせ給ひしを淵邊忽ち身をかはし太刀取直し御膝の邊りをしたゝかに打ちにける半年ばかり土牢の中に屈みし御身なれば心は八十島に

はやれども御足さへも自由ならず遂にうつぶしに倒されしこそ無念なれ淵邊上に打跨り腰の刀を引抜きて御頸をばかかんとす宮は御頸縮められ刀の鋒啣へさへ押せども引けども放させ給はず淵邊も今は必死となり力まかせに争へば刀の鋒先一寸許り墮止とばかり打折れたり淵邊添差引抜きて御胸元を二太刀許り柄も通れと刺しければ流石の宮もよはらせ給ふやがて御頸搔き落し御髪掴みて走り出て明るき處にて見奉るに噛ひ切らせ給ひつる刀の鋒口中にとゞまり御眼猶生けるが如くなり暴逆無道の淵邊なれど其御様に畏れをなしかたへの藪に投げ棄てゝ立歸りしこそ無慘なれ御前に候ひし南の方は此有様を御覽して餘りの恐ろしさに身も

すくみ手足もたゞでおはしけるが懸て人
 心つきければ藪の中なる御頸を静に取り
 擧げ給ひしに御膚も猶冷えず御目も塞さ
 がせ遊ばさず元の氣色に見えければ若し
 夢にてやありつらん夢ならば覺むる現に
 てもあれかしと泣き悲しみしこそ道理な
 れ竹の園生に人となり忠勇無雙の資を
 以て建武の大業を助け成しあらゆる辛苦
 を嘗め給ひて空しく賊の手に殞れ鎌倉山
 頭今も尙遺恨の雲を残し給ふば心の内こ
 そ悲しけれ二階堂の土窟の中に遺したる
 宮の御魂は「後の世の大和男子の鑑とて
 鎌倉宮の宮柱」太しく建て、薨さへ昇る
 旭にかゝやきて官幣中社と仰がる、明治
 の聖代こそめでたけれ明治の聖代こそめ
 でたけれ

(新)同窓會

鳩に三枝の禮あれば犬に門もる識もあり
 況や萬物の靈長たる人と生れて「いかで
 かば鳥やけものにおとるべき」「されば遙
 るけき路をしもいとひなく」同じ學びの
 窓の友寄りつどひ來て今日こゝに圓居
 の筵うちひらき文の林の奥ふかく教をう
 けし師を迎へすぎし昔のものがたりかた
 みにしつゝ親しむは「實に樂しみの至り
 なり」おもふ心のさまぐを「くづしい
 でては降積る雪の光りと夏の夜の螢の影
 に學び得し物の理説さあかし互ひに智識
 を取りかはし陸ひ遊べるそが中に受し教
 を忘れざる心の中を敷島の大和歌にもし
 るさんと

今日といへばことはの花も匂ふらん

おなじ學びの友の圓居まどろに

▲と詠よしまたは餘興よそがに添そふる物の音ねに悲憤ひびん
の情なさけをも覺しえいとどむかしのしのばれて
「上うなきおもひを盡つくしけり」幾世いくせい經へぬと
もかまはらじと契ちがひり置おきつる同窓どうそうのこのつ
どひこそ目め出でたけれ

(古)兵六物語

眼疾がんじやくある者は必ず三體さんたいの月つきを拜まみ心こころ慥しんす
る者は必ず鬼畜きじくの妖怪やかいに魔まはる茄子かきを踏ふ
て蝦蟇しゃまと驚おどき繩なはの横よこたはるを見て蛇へびの蟠わだかま
かまるかと膽いを消くすは皆是みなれ己おのれの氣騷きさわう
して本然ほんぜんの「心氣修しゆまらざるが故ゆゑなり」
去いれば心氣修しゆまらざる時は「何國なんこくに行く
としても然しかも化物けぶつ共に惱なまされざるはな
し本心ほんしん專せん一いつにして元氣げんき精神しんぱん膽魄たんぱくを缺くく事
なければ何れなんの所ところよりか邪氣じやくを引ひき妖怪やかい

の目寄めよを生なせんや兵六へいりくが如ごときは心氣元しんきげん
より修しゆまらざる故ゆゑに三眼錢目さんげんせんめの猿阿彌ざるあみが
危あやさを脱だれ震ふるひ怖おそれて行く處世ちよせの中に道みち
こそなけれ魔蟲まぢゅう原山げんざんの奥おくにも化物計けぶつけい何
と菖蒲しょうぶの谷蔭やういんや目口めぐちも讀よめぬ面魂めんこんの無面むめん
相あひまの小坊主せうぼうしゆ唯ただ獨ひとりり赤裸せきだにて兵六へいりくが歩あむに
添そて附來つきたる兵六へいりく急いそげば己おのれも急いそぎ止とまれば
己おのれも止とり走はるときは己おのれれも走はり靜しずに行いけ
は小坊主せうぼうしゆも靜しずに歩あみ跟つくること恰さも影かげの
形かたちに従したがふが如ごとし兵六へいりく慄おそれとおぞけ立ち聲こゑを
荒あげて云いふ様さまはやれ己おのれれ何物なにものの小悴せうさいぞ何
の用事ようじあつて我が道行みちゆきく後あとに跟つき來きるぞ
坊主ぼうしゆが曰いく我われこそは鞍馬あなま天狗てんくの落胤らくいんに聞き
間ま小坊主せうぼうしゆといふものなり此こゝ比ひ巢立すだての雛子ひなこ
なれど自然しぜんに備そなはる自慢こゝろの力相撲ちからすもうは現まに
二十山にじゅうざんから習しふたぞいで試こに勝かつ負ま々と

力足を踏んで飛びかゝる己れ似合ぬ小作
 物首に刀は引出物只一討と悔りて二つに
 なれと切り付くればひらりとくぐる妻手
 の下突かんとすれば弓手の脇へ飛び脱る
 是は仕たりと岩の角松の飛び根は如何程
 も切りたゞかれて甲斐もなし」其自在な
 る事電光のひらめくが如し又熊坂の長
 範が物見の松の戦ひに似たり今は刀を投
 捨て、大手を廣げて捕へんとすれば小坊
 主早く俯き曲り尻を鋒立て紫尻紅を引張
 て御峯入を毎もなさると承る大和ならぬ
 と吉野路や御牧の馬の餓によびを吸くと
 は是なりとぶんと一聲相號すれば伏勢一
 度にとつと起り久敷茲に松の上藪の内よ
 り土手の上黒い小坊赤坊主白い小坊主黄
 坊主その中に山吹色の口なし坊主目なし

坊主鼻崩坊主を先として七重八重九重
 迄も取り圍み「己れ同志を寄せ太鼓手拍
 子打てたぐり掛るに兵六叫び云ふ様は今
 日は如何なる變な昏暮宥てくれや坊主ど
 も堪忍せよと働らけど皆毒色の鮪坊主吸
 付き舞付きかちり付き爰は五月の菖蒲谷
 蓬と離れはせんわいなと手足を獲らへ
 「引く網の漏れて出づべきやうは更にな
 し」兵六あつと心付き兼ねて習ひし光妙
 真言此時なりと早速に邪神の名號を唱へ
 かくあれば實にも梵呪の驗しありて闇間
 小坊主散々に茸に鹽のしを垂れて「程な
 く消えてぞ失せにける」是は不思議と見
 廻せば始めて知りぬ早松茸折り知り顔に
 生へ出てたるを頭残らず踏み折られ道の
 行く手に「倒れしを惜まぬ人こそ無かり

けれ」故なき迷ひの目寄せより偏に八百屋の事缺くと後にぞ思ひ知られける

(新)仁川海戦

堪忍は身を護るの基忍耐は事に臨んで「終りを全たうするの根なり」と去れば此の度日露の交渉は「文明を平和になし列國と友誼を篤くして東洋の治安を永久に維持し各國の權利利益を損傷なさずして永く帝國の安全を保ち賜はんと屢折衝を重ね提議し賜ふ事半歳の久しきに及び去れと露國は時局の解決を遷延し陽に平和を唱へ陰に海陸の軍備を増大し依然滿洲に占據し益す其の地歩を鞏固にして終に之を併呑し重ねて韓國の平和も方に危急に至らんとす帝國の國利に侵迫し況や露國が横暴に憤慨し我が國民も堪忍い

かでか禁せざる速に旗鼓の間に求むるの外なく有衆の忠實勇武に倚るべしと「詔勅あることを勇しけれ」時は明治三十餘り七年の「二月六日に佐世保の港を出發し我が陸軍を掩護なし行く司令官瓜生海軍少將の聯合艦隊は翌る八日に仁川港に着たりしが敵の軍艦眼の前にあれども屈せず同日の夕暮かけて夜半まで悉く我が陸兵を上陸せしめたり其時仁川の海戦に參與なしたるは浪速淺間に新高艦高千穂吾妻須磨及び明石の七艦にして淺間の外を第四戰艦隊となし千代田は先發して列の外にあり又水雷艇は鳩號雉子號を合せ率ゐたり去れば露の軍艦は翌る九日の正午に至る頃港を打出て「我が艦隊に發砲す我が艦隊は千代田を先頭に高千穂淺

間之に次き隙を隔て浪速明石新高を配置し前後に水雷艇を置き之に應戦し互の砲聲さながらに百雷の轟き渡り夕立の雨のかけりし勢ひにして白浪空に漲り砲烟渦まき揚り龍の雲を起すにさも似たり敵艦一隻は我が水雷艇に向つて頻りに發砲したれどいつも命中せず去れど先頭の水雷艇は敵艦に進み寄り少しも屈せず魚形水雷を發せしが風波の爲めに遮られ我が艦隊は是れを遁がさじと發砲し敵は數個處の彈丸を受け終に月尾島の西方に攻撃せられ砲戰半時過る後痛や今は「今は叶はじとや思ひけん」敵は二度仁川港に逃入りて英米佛伊列國の軍艦并居る其中に「遁れて潜む有さまは聞くも中々あはれなり」此時我が艦隊は各國軍艦に打向ひ

斯く成上は仁川港の退去を求め一切の障礙を除きたり去れば露艦の二隻は詮方なくも自から爆發し又は碇泊なし居る敵國の汽船も共に破壊して沈没するこそ是非なけれ露軍は百有餘名の死傷をなし其内二十餘名の負傷者は艦長を始とし佛艦に逃入り其外英艦に又は伊艦に入りて「逃れし者は數しれず」去れば我が艦隊はいつの死傷もなかりけり此一戦を経て仁川以南の制海權は全く我れに歸し陸軍の輸送にも些の障礙なし此捷報の傳はるや老も若さも「一同に萬歳を唱へけり」君が稜威は天地に轟き渡り日本の光りは四方に輝けり

(新)旅順口

黄龍雲を呼び起す力も頓に盡きてより滿

洲の野や高麗の山漫に荒らす貪慾の鷲の翼を束の間に殺さし勳功のあらましを「いざや奏でん聞よかし」明治三十餘り七年の二月七日の東雲の海に輝く朝日艦三笠初瀬に富士八島又敷島の曇なき君が御稜威を大空に翻へしたる軍艦旗高く掲げし六隻は東洋無雙の戰闘艦守るも撃つも自在なり巡洋艦には高砂や千歳笠置に吉野艦扱又装甲巡洋艦出雲磐手に吾妻艦八雲淺間や常盤艦以上合せて十六隻之に従ふ驅逐艦さつと降くる村雨に姿もいつか白雲や朝潮くぐる速鳥の外に數隻連らなりて譽を競ふ風情なり此精銳を率ゐたる聯合艦隊司令長官東郷中將を初めとし申すも畏きことながら東伏見の御宮に山階華頂の兩宮は御健氣にも將校の職を

奮て執り給ふ此神聖なる艦隊は上は金玉の御身より下は水兵に至るまで國の爲めには親にも別れ君のためには妻子を捨てし忠勇義氣の大丈夫が兼ねて期したる時來ぬと佐世保をあとに遠征の錨を抜て渺茫たる八重の潮路に乗り出でぬ「静かなること處女に似て逸する時は脱兎の如き我艦隊は逸早く翌八日の夕波に舳艫正々堂々と敵を目さしてぞ進みける露の艦隊は兼てしも彼が根據と頼みたる旅順の砲臺を後ろにし水雷艇を前にして圍陣形を作りつゝ守護嚴しく備ふるも我は流石に過ぎし頃渤海灣の戰に腕に覚えの大丈夫が奮て射出す巨砲の彈丸敵も劣らす打出す互の砲聲天地を動かし渦巻きかへす黒煙旅順口外山は吼へ海は怒りて忽ちに

身・の・毛・も・よ・だ・つ・修・羅・の・場・我・の・機・先・に・制・せ
 ら・れ・彼・が・陣・形・亂・れ・た・る・波・間・を・抜・て・我・艇・艦
 決・死・の・勇・士・が・鍛・錬・の・魚・形・水・雷・を・發・す・れ・ば
 狙・ひ・違・は・ず・命・中・す・其・音・凄・く・「浪・を・擧・げ・見
 る・々・々・う・ち・に・戰・鬪・艦・二・隻・の・外・に・裝・甲・の・巡
 洋・艦・を・沈・め・た・り・其・翌・の・日・に・猛・烈・な・る・總
 攻・撃・の・鋒・先・に・露・の・艦・隊・は・隣・に・も・或・は・撃・た
 れ・沈・め・ら・れ・右・往・左・往・に・逃・げ・散・り・ぬ・之・よ・り
 曩・に・仁・川・へ・我・艦・隊・を・分・遣・し・瓜・生・少・將・之・を
 統・へ・隙・を・窺・ふ・敵・艦・を・も・の・美・事・に・打・破・り
 英・佛・獨・艦・の・目・の・前・に・猛・き・功・績・を・あ・ら・は・し
 て・曇・が・ち・な・る・東・洋・に・起・す・御・國・の・神・風・に・吹
 き・拂・ら・は・れ・し・雲・霧・の・晴・れ・て・握・ら・ん・海・上・權
 手・に・取・る・如・き・捷・報・を・傳・へ・た・る・日・は・紀・元・節
 勇・み・て・祝・ふ・旗・影・に・老・も・若・も・一・齊・に・只・萬・歲
 と・叫・ぶ・聲・天・地・も・「碎・けん・計・り・な・り」

欺世欺天又已欺

財心狼骨萬邦知

縱然自恃頑兇性

焉敵堂々仁義師

地圖を按して固垂吞む我陸軍の兵が日毎
 に睨む日本刀西伯利亞の野やウラルの
 山も日ならず貫らぬかん鷺も翼を落され
 ん

常陸丸

征露の軍やうくに進みくくて南山の險
 阻も既に打ち破り音に聞えし要害の旅順
 口も閉塞し鷺の棲むてふ滿洲も君が稜威
 の旗風に「今は靡かぬ草もなし」心筑紫
 の嶋放れ「玄海灘のたゞ中に吹く朝風に
 日の丸の旗を翻へす常陸丸佐渡も續いて
 進みゆく船路はなれて白波寄るべや如何
 に遠からん何ぞあらぶる荒潮の逆捲く
 中に黒煙は只ひとすじに走り来て「われ

を取りまく敵の船は何事と云ふ間なく
 亂射亂擊雨霰れ進み遁れんすもなく千里
 を走る猛獸も水に入りては如何せむ萬里
 を翔る大鵬も水には翼折れぬべし「心
 ばかりは早やれども連送船のかなしさは
 進退茲にきはまりて詮方なくも敵艦に任
 せはてしぞ是非もなし佐渡は如何にとな
 がむれば霧にまきれてはかねども同じ様
 なる運の末輸送指揮官須知中佐これまで
 なりと思ひけん大久保少尉か捧げたる
 聯隊旗をば手に取りて都の方をふしをが
 み火を放ちてぞ焼きにける各々將士も取
 りくりに貴重の品を焼捨ぬ此の有様を打
 ち見つ、中佐は軍刀抜き放ち「無念の涙
 はらくと落つるを袖に打ち拂らひ萬歳
 唱へ悠々と腹かき切てぞうせにける連な

る將校始とし下士卒に至るまで同じ枕に
 伏せにけり「海に投じて死すもあり敵彈
 益す加ふれば甲板上はたちまちに屍の山
 をまづきつゝ血汐に支海の波はあけにぞ
 染みにける哀れなるかな常陸丸君萬歳の
 聲細く日は六月十五日夕日は波に落らさ
 れと「あやめもわかぬばかりなり「實に
 誠忠のつはものが「十年の間朝夕に磨き
 きたへし日本刀精氣こもれる切れあじを
 試さむ敵を前に見て遺恨の刀ひと太刀
 も翻いん事の幻しか駒のひづめに滿洲を
 踏みにじまぬも夢なれやウラルの山を打
 越えてあらまし事の功しを「思へば無念
 の極りなりあゝ一聯隊の我が勇士水漬屍
 は消えしかど國に殉せしますらをの「清
 き其の名は萬世に響き灘に立つ波の絶ゆ

る時なく仰がれて末まで遠く流るらん

(新)新田義貞(初段)

橋の花の匂ひにおくれぬは稻村が崎の藤
 なみのはなとうたひし如く今も猶かんばん
 しき「忠臣の名は聞えけり」此に新田左
 中中將義貞が「君に盡し、勳功を思へば
 いと、あはれなり頃は元弘三年五月二十
 一日の夜半なりき極樂寺の切通へ向ひし
 に大館次郎宗氏が本間に討れて軍兵共
 片瀬腰越まで引揚たりと聞えければ新田
 義貞は逞兵二萬餘騎を率ゐて片瀬腰越を
 打廻り極樂寺坂へ打向ふ明行く月に敵陣
 を見給へば北は切通しまで山高く路嶮し
 きに木戸を誘へ垣楯搔て數萬の兵陣を雙
 べ南は稻村が崎にて沙頭路狭く浪打涯ま
 て逆木を引懸て沖は四五丁計も大船を並

べ矢倉をかきて横矢を射せんと構へた
 り此陣は寄手叶はて引ぬらんも理なりと
 見えければ義貞馬より下りて甲を脱て海
 上を遙々と伏し拜み龍神に向つて祈誓し
 給ひけるは傳へ聞く日本開闢の主天照太
 神は本地を大日の尊像に隠し垂跡を滄海
 の龍神に顯し給へりと吾君其苗裔として
 逆臣の爲に西海の浪に漂ひ給ふ義貞今臣
 たるの道を盡ん爲斧鉞を把て敵陣に臨む
 其志偏に王化を資け奉り蒼生を安からし
 めんとす願くは四海の龍神臣か忠義を鑒
 み給ひて潮を萬里の外に退け道を三軍の
 陣に開かせ給へと至信に祈念し自ら佩き
 たる金作の太刀を抜て海中へ投げ給ひけ
 り「眞に龍神納め給ひけん兼てしも沙
 のひかざりし稻村が崎も其夜の月の入方

に俄に「二十餘町も沙引きて」平沙渺々として横矢射んと構へつる數千の兵船も落行く鹽に誘はれて「遙の澳に漂へり」扱ては不思議とこそは云べけれ

(新)一段

去程に義貞傳へ聞く後漢の貳師將軍は城中に水盡きて渴に及ひし時劔を抜て「岩石を刺しければ」飛泉俄に湧出たりと我が朝の神功皇后は新羅を責め給ひし時自ら干珠を取り海上に擲給ひしかば潮水遠く退きて終に戦に勝ちを得させ玉ふと是皆和漢の佳列にして古今奇瑞に相似り「進めや進め兵共と下知せられければ」江田大館里見鳥山田中羽河山名桃井の人々を始として越後上野武藏相模の軍勢共六萬餘騎を一手に成して稻村が崎の遠干

潟を眞一文字に懸通りて鎌倉へ亂れ入り數多の軍兵是を見て後なる敵に懸らんとすれば前なる寄手跡に付て攻入んとす前なる敵を防がんとすれば大勢道を塞ぎて討んとす進退度を失ひ東西に心迷ひて「いかがせん」爰に島津四郎と申せしは大力の聞えありて誠に器量人に勝りしが是れは大事に逢ひぬへきとて一騎當千と憑のまねたりければ詮度の合戦に向んと未だ方々の防ぎ場へは向はれず相模入道の屋形の邊にぞ置れける懸る處に濱の手破れて源氏已に若宮小路まで攻入りたりと騒きければ相模入道島津を呼寄て自から酌をなし酒を進め三度傾けて馬屋にありける關東無雙の名馬白浪と云けるに白鞍置きて引き行くを「見る人は浦山

しくぞ思ひける」
 「島津此の馬にひたと
 打乗りて」由井の濱の浦風に濃紅の大笠
 しるしを吹そらさせあたりを拂ひ馳せ向
 ひしに數多の軍勢是を見て誠に一騎當千
 の兵なりと思はぬ人こそなければ」義貞の
 軍兵是を見てあはれ敵やと匂りければ栗
 生篠塚畑矢部堀口由良長濱を始として大
 力の覺え取たる悪者共我先に彼の武者と
 組で勝負を決せんと馬を進めて相近づく
 互に名ある大力共人も交じへず戦ひける
 あれ見よとのめきて敵味方諸共に難唾
 を吞で汗を流し是を見てぞ控へたる「懸
 る處に島津馬より飛び下り」甲を脱て閑
 々と」身繕ひする程に何をなすらんと思
 ひしに降参なして義貞の勢にぞ加りけ
 る貴賤是を見て譽つる言葉を翻がへし悪

まぬ者こそなかりけれ是れを降伏人の始
 として或は年來重恩の郎従或は累代の家
 人共主を棄て敵に附こそ「目も當てられ
 ざる有様なりけれ」斯くて義貞の君に盡
 し、誠忠は猶橘の花の香におくれす匂ふ
 藤島の神と崇めて今も世に鏡とこそは仰
 がるれ

閉塞決死隊

海行かば水づく屍と豫てより誓は固き海
 の丈夫國のため又人のため數ならぬ身を
 「殺しても仁をなさむの心より」我劣ら
 じと争ひて「願ひ出でたる決死隊その壯
 烈は千古なほ鬼神も驚き天地も感じ懦夫
 も立つべき功勳は聞くも中々勇しけれこ
 ゝに日露の兩國は端なく干戈を交へつゝ
 我海軍は旅順口にぞ進みける港の口を閉

塞し遁れ出づべき敵艦の航路封鎖を行はむと長官の令のもとに此舉に加らむと願ふ者二千餘人とぞ知られける長官満面に悦喜ありて撰び出でたる勇士こそ世に七十七士の名は高き固より命を鴻毛の輕きに比し生きて歸らぬ決死隊頃しも二月の廿四日の朝ぼらけ霧なは深き旅順口天津丸を先立て、老鐵山の此方より我閉塞隊は波を蹴立て進みける敵艦はそれと見て探海燈を閃かせ雨か霰か打出す音すさまじき巨砲の彈丸に天柱碎け地軸裂けんばかりなり鍛へては百鍊の鐵より堅き決死隊いかたためらふ事あらん進めくと勇しく猛りにたけるはやり雄の勇ましきかな「閉塞隊の吾將士」自ら五隻の船に火を放つて萬歳の聲を高く唱へ虎穴に

入りて安々と虎子を得たるにさも似つゝ重き任務を果してぞ「九死の中に生を得て」世界の歴史に比類なき高き譽を己が身に擔ひてこそは歸りけれ

(新) 廣瀨中佐

玉の緒のたえても已まじ敷島の大和男兒の義務つくさであはれにも優しく詠みし歌主は渤海灣頭一陣の夜嵐さむく散りゆけど「軍神の名は後の世に」語りつたへてぞ匂ひける「それ旅順口の戦に港口閉塞の壯舉にあづかりしは忠勇無二の決死隊敵の砲丸の的に立ちて萬死の中に比類なく虎狼の窟を探りつゝ譽れを擔ひて歸りしが再び鮫鰐の淵に臨まむと運遭船を率ゐては港の口に進みつゝ天地も劈く彈丸を霰行手も迷ふ探海燈の閃きも」物

の數とも思はずして港口閉塞の任務を果
 さむといづれ劣らぬ武夫の中にも廣瀬
 中佐と聞わしは此度の壯舉に再び加はり
 て殊に指揮官の身なれば衆に擢んで働き
 て運遭船に火を放ちポートに乗りて歸ら
 むとせしが己の部下の見えざれば船の中
 まで尋ね行き三度迄引返せしが敵の巨丸
 に「悼しや春の夜嵐はかなくも」包ふ櫻
 と咲き出でし吾海軍の名花をば「わはれ
 さそひて船の上只一片の肉塊を形見とば
 かりのこし置き屍は清き千尋の海の底潔
 く散る武夫の譽の戦死をぞ遂げにける」
 されども中佐が忠魂は「天かけりても海
 の上」尙吾海軍を守りけむ敵の旗艦の沈
 没してマカロー提督戦死せしも中佐閉塞
 の功も多かりと世に護國の神と唱へては

「尊敬せぬ者なかりけり」むかし楠公兄
 弟は七度人と生れ出で國賊をば滅すと最
 後のをりに誓ひけり中佐も此語に感激し
 嘗つて軍艦扶桑にありし時

生ニ于扶桑 死ニ于扶桑

一死酬國 七生護皇

と詠し出で心に深く忠孝の二字を刻して
 健氣にも國のためとて勇ましく玉と碎け
 てつくしけむ君がいさをの忍ばれておく
 露しげき青山の君が墓に詣でては鬼と呼
 はれし「武夫のいますか如きいさをしを
 忍ぶ夕の村雨に誰か涙を濺がさる

(新) 鴨 綠 江

霜雪をしのぎしのきて風雲の來る時日を
 待ちにまち我が日本にあだ浪のかゝるし
 ぶきを拂らはんと我が陸軍の忠勇猛士が

鴨綠江を渡りたる其勳功しを」書に見る
 だに勇し、」頃は明治三十餘り七年の四
 月の末の二十まり六日の朝ぼらけ我が陸
 軍は決死の勇士を斥候に各一挺の斧を
 脊負らせて九里島の北岸より鴨綠江の本
 流を泳ぎ渡りて敵地なる岸の小舟を數十
 隻奪ひ取り又は電柱電線を切斷し夫れを
 ば舟に結びつけ打乗り恙なくして此大任
 を完うし「歸り來るこそ雄々しけれ」又
 も再び決死の人々を」相募り銃劍を携
 へ奪ひ來りし小舟に乗り本流を横さりて
 岸に上陸し此時石溪洞にありし敵の歩兵
 は逸早く之を本隊に通し敵は直に我に向
 て一齊射撃を爲せしかば第一第二第三
 の先頭船は危険の地位陥り損傷殊に多か
 りけり去れど屈せず應戦し工兵の損害も

あれと之に反して元化洞の一隊は何等の
 損傷なかりしが我が軍は目指す九里島の
 河岸に上陸し勇進猛撃すれば「敵は潰亂
 し」退却を始しが之を追撃して背面の河
 岸に到れば脆くも敵は九里島を打棄て鴨
 綠江の流を辛く打渡り又も一齊射撃をな
 したれと我が軍は些の損傷もあらされ
 ど敵は數多の損害を受けたりければ於赤
 島に駐屯せし敵兵は我軍に向つて射撃を
 試みしも遂に九里島の敗兵と諸共に退却
 し九里於赤島の二島は我が勇敢なる軍隊
 に依りて全く之を占領し「敵は虎山に向
 て逃たり」此戰捷の傳はるや皆一同に大
 聲萬歳を唱へけり

(新)南山の役(初段)

屍の山血汐の川風醒き南山や皇國のため

と一筋に願みもせぬ武夫の身は「戦場の露と消え」勇名は後の世に傳りて「千秋萬歳朽ちざらむ敵の主力を注ぎたる金州南山の要害は一夫守れば萬卒も攻るに難き峻嶮にて敵は地形の利を頼み此處に數多の砲を備へ地雷を許多地に埋め鐵條網塹壕に到る迄防禦いかめしく構へつゝ寄せよ日本の軍人いかに雄猛く攻めくとも天に翔るの翅なく地に潛るの術なく金城鐵壁にも優りたる此要害は破られじと心私かに悔りけり我軍かくと傳へ聞き帷の將士思へらく特む所は百難を犯す力のあらむのみ綾にかしこき大君の御稜威を頭に戴きて只忠勇の一筋に磐根錯節を凌ぎゆく皇御國の兵士がたゆまず倦まぬ力もて攻むるの外はなからむと「こゝに

南山攻撃の議はなりぬ」戦の地は金州半島の「形勝にて人は東西強國の軍隊が必死極めしをたけびに雌雄を互に闘ば球を争ふ雙龍の迅雷疾風の裡令あり三軍直ちに進むべしと小川將軍の率ゐたる第四師團の兵を左翼に備へ中軍の第一師團には竹の園生の御裔にて其名長き伏見宮貞愛親王金枝玉葉の御身を以て自ら陣頭に立たせ給ふ豪膽一世に聞えたる奥大將は之を統べ「歩武蕭々南山さして進みゆく」將士の意氣は盛にて「すでに南山を呑みし如くなりものふの血を流しけむ遼東に十年の春はめぐりきてこゝに今年も春過ぎて頃は五月の二十六日曉の雨のやみ間に霧晴れて指呼の間に敵陣を認むる程になりぬれば南山の砲壘に向ひ釣瓶

放ちて一齊に砲火をこそは開きしが待設
 けたる事なれば敵も直に應戦す砲の響き
 は激々と山も崩るゝばかりにて暗雲忽ち
 に四顧を罩め乾坤晦冥紫電閃き彼も激烈
 なる砲火をば勢猛に交ふれどいかでか我
 に敵すべき我弾丸は悉く皆好き位置に曝
 發し破壊の力も猛烈なれば流石烈しき
 敵軍の砲火も次第に「衰へつ勇敢世に聞
 えたる我歩兵はこれを見て脱兎の勢を以
 て前進し雨や霰とふり来る砲丸の中を物
 ともせず敵壘近く押し寄せぬされども敵
 は峻嶮の高さに籠れるのみならず防禦殊
 に嚴しければ我に乗すべき機會なく彼は
 地の利を頼みては飽く迄位置を死守しつ
 ゝ絶えず射撃を續くれば我猛烈なる砲丸
 は敵の塹壕に支へられ是を破るに由なく

して「しはし前進は止りぬ」こゝに大島
 將軍の率ゐたる「第三師軍の一隊は三軍
 の左翼にありけるが彈藥將に嬉きむとし
 長く戦ふべからねば敵に向ひて強撃を實
 行せんか退て兵を後方に收めむか外に策
 とてあらざれど我忠勇なる將卒は唯大君
 の御爲に進みて死あるのみを知る私の
 「ために退きて生を願はむ者もなかりけ
 り満身の勇氣をふり起し決然突撃の舉に
 出ぬ

(新) 一段

去程に是等の勇士は始より彈丸雨下の間
 にて突撃の令下るをば「今や遅しと待ち
 し者」誰れか奮ひ起たざらむ「意氣天を
 衝く勢に」敵の陣地に向ひしが敵の地雷
 の電線は見出されてを幸に危き難を免れ

し一千米突になんくたる鐵條網は顛落
 し或將卒は猛烈なる敵の砲火に是非なく
 も將某倒しに倒れつゝ戦友の累々たる
 屍を踏え尙進んでは空しく倒れ一回にし
 て成功なく二回三回又四回繰返したる突
 撃も空しく多数の死傷を出し猶敵壘を抜
 くを得ず我全軍は悉く苦戦の中に陥りけ
 れば暫らく突撃を止めしが天の與へか折
 よくも干潮のために沖合に一時退きたる
 我砲艦は此時滿潮に乗しつゝ敵の砲壘
 に近づき左翼の防備薄きを見て「猛烈な
 る砲火を加へたれば」敵の砲火は撲滅せ
 り鬼籌神謀機を見るに固より敏き小川第
 四師團長は乗すべき機會今なるぞと直に
 師團の兵を擧げ「勢ひ潮の如く敵の左翼
 に猛進し雨下する砲火を冒しつゝ敵の控

えし高き地に滿腔の決死を以て突撃し崩
 れ立ちたる敵壘に肉薄し伏屍山を築き
 流血杵を漂はすの慘を見るも唯怒り猪の
 一筋に進むを知りて一足も後を顧る者も
 なく屍を踏え血を啜り勇氣日頃に百倍し
 彼我の劍尖相接し遂に難なく「南山の仇
 なす敵を打拂ひ茲に歡聲天地を動して
 各砲壘は茜さす旭の旗の翩翻と「夕の空
 に輝きぬ」難攻不落と恃みけむ」世に南
 山の堅壘も僅に一日の戦闘にて占領しけ
 る吾軍は今や旅順の死命を扼し得たりと
 こそ言ふべけれさるにても此度の激戦に
 て我陸軍の眞價をは世界萬國に遺憾なく
 示されぬ宇内固より廣しと雖も世界戦史
 の上に「又かゝる例はあらざらむ」世に精
 悍を装ひし「露軍の假面剝落し今や軍氣

は沮喪して勇氣おのつから挫ては鬪ふ心
更になくあはれ旅順の堅壘もあれどもな
きが如くにて臥薪嘗膽指折し十年の恨み
束の間にやがて晴れゆく時は來む夏草茂
き南山の苔路の夢よ安かれな皐月の空の
雨もよひ冷たく眠る武士の高き功勳を思
ひ出で忍び音洩す時鳥啼くや血汐の芳ば
しき「忠と勇とに身を捨て、萬朶の櫻も
世に芳る」大和魂語りつぎ海の外まで言
ひつぎてたへぬ者こそなかりけれ、

(古)赤 壁

神無月しぐるゝ時の雨雲の「いかに晴れ
てか山高く月澄み登り水落て」岩根あら
われ寒き江に一葉とうけて酌む酒のたゆ
とふ影に三年經し昨日ぞ移る其秋の小竹

のしらべ其節を訴ふる如き木枯の吹すさ
む大空にむきたるならん蘆田鶴の近く飛
渡り更る夜を「鳴音もながし浦浪のうへ」
いかに鶴の毛衣歸しけん昔の夢今も見
へつゝ、

(古)千早振

千早振る神のみ代より吳竹の世々にも絶
へずあまびこの「音は野山の春霞」思ひ
亂れて五月雨の空もといろに小夜更て山
郭公鳴く事に誰れも寢覺てからにしき龍
田の山の紅葉を見てのみ忍ぶ神無月しぐ
れくゝて冬の夜の庭もはだれに降る雪の
猶消歸へり年毎に時につけつゝ哀れてふ
事をいひつゝ君をのみ千代にと祝ふ世の
人の思ひ駿河の富士の根の燃る思ひもあ
らずして別るゝ涙ふち衣おれる心もやち

草の言の葉ことに皇國のをふせ畏みまき
くの中に盡すと伊勢海の浦の鹽貝見拾
ひ集めとれりとすれど玉の緒の短き心思
ひあへず尙新玉の年を経て大宮にのみ久
方の晝夜わかすつこふとて「歸り見もせ
ぬ我宿の」忍ぶ草おふる板間あらみ降る
春雨のもりやしつらん

(新)送 別

茜さす我が日の本に人と云ふ人の中より
撰まれて海原遠く浦々の浪の花咲く異國
に渡り行くなる君が名と譽れは「世々に
残るらん」茲に舟出を祝はんとを込め
て足引の山にも狩り得海に釣り川に漁り
野に求め尙ほ飽足らで鳳を裂き麟を屠り
て盃を勧むる中にかたへより吟ずる聲の
高らかに

漕城長雨濕輕塵 客舍青々柳色新
勸君更盡一盃酒 西出陽關無故人
古き調への唐歌に思を寄せて別れなば惜
しむ心のなつかしく皆とりくに又酒を
勧めて興をぞ添へにける「暫くありて一
同にさかづきささげ起立して君萬歳と唱
へけり君萬歳と唱へけり」

(古)灘廻り

頃は彌生は末津方君が行衛を尋んと阿こ
んが濱より船に乗り漕ぎ出で見れば南林
寺の「松の葉色は常盤山」濱に鹽焼く夕
煙空に横消へて消へて跡なきはかなさや
洲崎に寄する白浪は沖に名に負ふ櫻島腰
地に伊達の雲の帯おび咲き亂れたる旅衣
きて見ぬ人の心と北は祇園の御社玉龍山
の鐘の聲無明の夢や覺ますらん吉野の里

の遅櫻谷戸の出る鶯の初聲ゆかしき時鳥
 浪間に見えし沖小島や猶告渡る鳥島友呼
 ぶ千鳥幽にて何れ歎きの種ならん其名も
 高き御社愛宕山とは是とかや筑波の神の
 おはさねど鍋の數々田の浦や大磯小磯打
 過ぎて爰は險阻な茅落し三船の明神伏し
 拜み暫しは爰に浮かり船空吹く風に帆を
 揚げて君に大崎龍ヶ水心岳寺をも打過ぎ
 て爰は脇元別府川や加治木の里を詠むれ
 ば實にや名高き蛇尾岳嵐に花の數散りて
 流れて出る黒川や七里小濱や長濱の眞沙
 の數は盡きるとも猶も盡きせぬ我が思ひ
 捨て置かれぬ濱の市妻手や小島の辨才天
 梢を傳ふ猿の聲弓手遙かに見渡せば彌陀
 の淨土は八幡の宮居を爰に立せ給ひ常燈
 の光り照らさせ給ふ源と遠く流れて出る

新川の沖に釣舟數見えて櫓櫂の音に驚き
 て浮寐の鷗も立騒ぐ猶も小村の海士人や
 苦を敷根の夢にだに「音信もせぬ船の中」
 遠寺の鐘のつゝと嵐もそよと福山の
 宮が浦にぞ著きにける

(新)四方山

四方山に残る雪の解けもせぬ頃より待し
 花園の梅咲ばやと思ふ間もなく鶯は「其
 香を早く送りけり」いざ杖ついて其幽魂
 を「訪ひ尋ねんといふ中に隅田の櫻咲匂
 ふ彌生の空と移り行く老も若さも皆思ひ
 く」に花の木蔭に群れ遊ぶ明日に至りて
 我は又因果の廻る小車の絶て長閑き春の
 日を未だ一日も人並に花見し事のなき
 中に雪かと思えし白妙の梢はいつか空蟬
 の住かとなりて夕すゞみ風ぞ戀しき夏景

色變り行世の早ければ彌々けふは思ひ立ち隅田の小船に棹さして綾瀬あたりに逍遙へりされば古人の唐詩に綠陰幽草勝花時と吟せしは實に理と知られたり見ゆる限は筆の先言葉のはしの及ぶべき韻を拾ひ句を摘みて月の出るをも白浪のよるとはいつかなりにけり嗚呼此青葉の詠め草の緑もいつまで長く思ふべき滿れば缺る習にて繁りくし其後は亦秋風の誘ひ來て瞬くひまに霜枯れて梢とこそはなりぬらん斯く光陰の矢より早く過るをば知らば人々「光陰を惜みて玉を磨くべし」磨きし玉は君が代を守る寶となるぞかし

(新)大和魂

花も紅葉も數かぎり多ければ千種の匂ひ

と深く人の心を動かせど「櫻に増すはななかりけり」吉野の山の春霞朝日に匂ふ花にこそ大和魂なぞふなれ此魂は日の本の人の身ながら持分て頭に宿る物ぞかし國を守らせ世を憂ひ直く正しき誠もて君を敬ひ親を思ひ人たる道にいさをしく心の柱ゆるぎなく彌かたくたてつかへつゝ治まれる日も亂れ世も貴き賤しき拘らず國の爲にと一筋に勤むる人ぞかしこくも此魂持たるしるしなる斯るしるしの著るしく仰ぎ仰く臣たちは菅原の神和氣の君楠を朝臣を初めにて昔も今も數しらず絶る間もなく産れ出花の匂ひ長へに顯す人のあればこそ動かぬ「國の寶なれ」譽れは文に輝し幾千代驛り行らん日の本の大和魂めでたしや

(新)若木の花

日本心の花と咲く其の櫻井の驛より汝を
 此處へ歸すとて教へ給ひし父上の「語は
 已に忘れしが」獅子は生れて程もなく千
 尋の谷より刎返り實に栴檀は二葉より高
 き香りを放なり御身幼なく有りとても父
 が予なればよく思へ腹切れとては歸され
 ず跡を問へともものたまはず我れ打死をし
 たりとも天子まします限りには一族郎黨
 いたはりて軍を起し朝敵を攻め滅してみ
 こゝろを安め申せと遺言を妾にこそは
 傳へしが傳へし御身はや忘れ自害せんと
 は何事血まよひたるか正行と母の語に鞭
 打たれ心の駒をたてなほし童遊の軍にも
 朝敵を討ち尊氏を斬らんと思ふ外ぞな
 さ「心の内こそゆゝしけれ」かくて月日

によどみなく盛の齡になりぬれば家の子
 數多引連れて吉野を守護り奉りところ處
 の戦に功名手柄あらはして末頼もしき若
 武者と帝もおもひ給まいしに逆賊高の師
 直等雲霞の加く群りて吉野の宮を攻めん
 とす正行帝に奏すやう君の御爲父の爲命
 を捨て、忠孝の名を止むべき時來り敵の
 首を取り來るが臣が首を取らるゝかふた
 つ一つの軍せん「是れぞ最後の御目見え
 と」涙を袖にかければ南殿の御簾を捲
 かしめて御前間近く召させられ數度の軍
 に打勝ちし功を深くめで給ひ肢肱と頼む
 汝なりその身を軽く思ふなといとも畏き
 勅誥に答へ申さん語なく塔の尾さして罷
 り出で如意輪堂に名々名字書しるし正行
 は矢しりもてかへらじとかねて思へは梓

弓なき數に入る名をとむると敷島の大
和言の葉ゑりつけて四條畷にうち出で
て「目にあまりたる大軍を右往左往にき
りやぶりのく迄敵を腦まして飯盛山の
山本に草むす屍大君の爲に死したるます
らをは實に獅子よりも勇ましく梅檀より
も香はしき」名を後の世に残しけり名を
後の世に残しけり

(新)忠 度

義仲已に攻登り都へ入ると聞ゆれば平家
の「噪限りなし」急ぎ御幸を唆し西の方
へぞ落ちにける薩摩守忠度は七騎にて落
行道より引返し「五條の三位俊成の許に
立寄り懇ろに見參請ひて申す様此年比は
疎に思ひもせねど世の亂れ天下の騷頻に
て一門の運盡き果ぬ然るに君は勅を受け

歌を撰ばせ給ふとか我身こそ言がひなけ
れ此の道に名を残さんは前生の面目なる
に同じくは腰折なきと一首も御恵みをも

蒙らば草葉の蔭に有るとても嬉しからむ
と巻物を箆の中より取出で渡されにけり
俊成も忘れ形見を見るよりも「涙に袖
を濡しける」忠度今は屍を晒さば晒せ西
海の「浪に沈むとも何の思ひかあるべき
と」馬に打乗り甲の緒をしめつゝも走に
ける心の内こそやさしけれ千載集に二首
を取られしは忠度の心の誠「げに人を動
かしにや」「さゝ浪や志賀の都は荒に
しを昔乍らの山櫻かな」と「言へる言の
は殊更に愛ではやされて今の世に知らぬ
者こそ無かりけれ

(古)月 照

花の都も秋は猶夕淋しき風情なり名は流
 れたる清水や「落ちくる瀧の乙羽山」秋
 の葉色の溝ごとに散るや紅葉の散りく
 と亂れ行く世の浪花江や葦のさはりは繁
 くとも尙世の爲めに身を盡しつくさんと
 ても筑紫瀉浪のよる岸浪ならぬ操もいつ
 か深みどり色は替らぬ青柳の驛路を越て
 香椎瀉たゝらの橋を打渡り千代の松原千
 代掛て万代かけて君が代の千歳の松によ
 そへつゝ神に歩を箱崎の社にかけし四つ
 文字の筆の主を能く問へば延喜の帝畏く
 も御手をば下しましたし爰も昔は石
 だたみかさねくし白浪のよせし昔を忘
 れじと恨み浦わの片だすきかけて歎くも
 哀なり濡衣塚の濡衣吾が身に著たる心地
 せりやがて博多の假住居こゝも波風噪が

しく又行先は薩摩瀉沖の小島にあらねど
 も心細くも都にて誰か憐と思ふらんたよ
 る心は筑紫瀉一人の外に打明けて語ら
 ふ人も浮枕波路隔てゝ野間の關屋の關守
 にせきとめられて又舟に乗るも夫かとよ
 るあなた波にゆられて行く先は黒の瀬戸
 てふ名も憂しや「頓て鹿島かこの鳥つ
 ばさ縮めて潜みしが又木枯の風に驚きて
 日向を指して舟出せし日は神無月望の夜
 の傾く月と諸兵に照り輝きて曇なき身は
 大君の爲にとて爰に一人のさつまがたい
 かなる縁にし前の世に契も深き舟のなか
 底の藻屑となりぬるを乗合人も舟人も權
 の雫の露ほどもさりとほしらす白波の
 「立噪げども甲斐ぞなき」猶東雲の明鴉
 なくより外はなかりけり

(新)菅 公

花の盛りも風吹けばむげに散り行く習あり照る日の景も雲立てば光をかへす例あり延喜の御世に菅原の道真公と聞にしは學の道の才高く心掟も雙なく賢くませば「朝廷邊の政をば行はせ」君の御覺厚き故官位も彌増り右大臣にぞなり給ふ斯る寵を安からず妬む餘りに時平が造り構へてなき名をば負せ奉りし讒言に聖の皇も惑はされ筑紫の國へ流されぬ「心の内こそ悲しけれ」御子達も又多かれど皆分々に位あるを遠き國にぞ退け給ふ幼き男子女君二人別を惜まれて慕ひ泣をす公も許し給ひて共に率ゐて下らせ給ふ御前の櫻梅さへも名殘惜氣に思はれて主を忘れぬ者なれば吹こむ風にと詠め給ふも哀なり

かく有らぬ事に罪せられ辛き目に逢ふ道すがら胸塞がれば邊も遠くなるまゝ君が住む宿の梢も行々と隠るゝ迄に願し口吟など遊して太宰府にこそ著かれしが來し方の道遙々と海山遠く隔りて野に立つ烟浮雲の徒住居さへ朝夕に見聞ける物も何となく心意もすこく詫しきに繁き泪を拭ひつゝ謠ひ給ひし言の葉は「綾に長くあわれなり」心盡しの秋風に比は九月十日の夜空の氣色もおかしきに月の顔のみ守られて去年の御宴戀しければ恩賜の御衣今尙_ほ在_は棒持日々拜_す餘香_を誠_に御衣は身を放たず傍にこそ置れしか君を思ひの真心も此一詩にて知られたり謫居の中の文を集め紀の長谷雄にぞ送り給ふ見るに長谷雄は伏まるび悲しまれし

ぞ理なるかく旅の空にさすらいて鹽たれ
 がちにましけるが遂にはかなく成り給ふ
 口惜しとも口惜しきはいはむに辭なかり
 けり世の公論は百年を待たあらず二十年
 も未だ過ぎぬを本官に復し給ひて正二位
 を贈られけり正一位太政大臣になり給ふ
 は天曆の事なりとかや北野の宮に祭れる
 は正曆中の比なりき官幣にさへ預りて
 今の世まで上下にもち齋かれし菅原の大
 神はしも生る世に屈み給ふも後の世は永
 く伸びけり散る花も亦春を得て「曇る日
 も本の光に立復る」理しるく顯れて崇む
 る世こそ畏こけれ

(新)小楠公

正平四年正行は吉野の皇居に参内し四條
 隆資卿を経て「心の中を奏しける」先臣

正成勤王の軍を起し朝敵を打滅して先帝
 の叡慮を安め参らせ「其後天下又亂れ逆
 臣尊氏築紫より都を指して攻上る正成覺
 悟や極めけん終に津の國兵庫なる湊川に
 て潔よく戦死をこそは遂げたりき其時正
 行漸くに十三歳になりぬるを軍の場へは
 伴はで河内へ送り歸へしつゝ敵を亡ぼ
 し我君の御代になせよと細々と殘こし教
 へし言の葉は今尙耳に留れり然るに正行
 今ははや年も壯になりければ今に及て朝
 敵を打亡さで過ごしなば何時をか待たん
 人の身は思ふに任せぬ習にて若しも病に
 侵されて空敷死する事あらば君の爲には
 不忠なり亡き我父には不孝なりされば此
 度師直と「手痛き勝負仕り」彼が首を討取
 るか臣が首を取らるゝか二つの中の戦に

雌雄を決し申す可し今度の軍正行が必死の覺悟に候へば今生にて今一度龍顏拜させ給はれと申しも敢ず涙をば鎧の袖に注ぎつゝ義心氣色に見えたりき天子御簾を揚げさせ近く召れて正行よ數度の戦ひに敵の勇氣挫きしは叡慮を慰するに足るぞかし」父子累代の勳功は深く感ずる所なり朕は汝を股肱とす必ず命を全うし王家の重きに任せよと畏き詔ありければ正行首を地に著けて之を最後の參内と思ひ定めて退きぬ斯くて一族郎黨と後醍醐帝の御陵へ參り御暇申し上げ如意輪堂の「壁板に各名字を書き列らね」又其の奥に

「歸らじと兼て思へば梓弓

なき數に入る名をぞ留むる

一首の歌を残し置き吉野を出で、勇しく

四條驛に向ける」

(新)國の御柱

新川流れの水のいと清く名も橘の花の香は千代はおろか萬代の「末の末迄薫るらん」赤坂山の秋の暮其真心の紅は紅葉の色に輝きて三度よせ來る人波を太刀風強く打拂ひかなたの空は雲晴れて月すみよしや天王寺鐘の響はそれとなく諸行無常と告げ渡る川は寄手の三途川おのれとおぼれ沈み行千劔破の城にさきがけて勝つ色見せよ山櫻嵐や花の仇なるらんと二人のしれもの詠みたるは我が身の上としらま弓引かれて葉の人がたにたぶらかされて二つなき命を落すやからこそ哀れと云ふもおろかなれ」金剛山の巍峨として雲の上迄聳えしは動かぬ君が心にて寄手

を押へ其罪を糺すの前ゆ押し出し出雲
 路掛けて火を放ち僧都をかたらい泣がし
 めてあらぬ屍を尋ねさせ四條川原による
 波のよりく人を欺くも心は清き櫻井の
 驛に於ていとほしき蕾の花に別れしも皆
 大君の爲ぞかし」筑紫の山のはとゝきす
 友呼び集め九重の雲井の空を心ざし飛
 ばんとするを射留めんと弓に矢番ひ見渡
 せば須摩の上野と鹿松の岡にとよめき叫
 び合ふ聲はましらか小男鹿かのがさじも
 のと遠近に簇がり集ふ毛物等をほぐしに
 あらぬ鎗先にさして行衛をつくぐと思
 ひ廻せば此の後は山ほとゝぎす山を出て
 誰れ憚からず啼渡る世とやならむと末か
 けて悟るたけ雄は今こゝに死て七度生れ
 来て鳥や毛物をかりつくし大御心を休め

んとうがらつどへて湊川哀れはかなきう
 たかたの「水の泡とぞ消にける」

豹死留^レ皮豈偶然^{ナラシヤ} 湊川遺蹟水連^ル天

人生有限名無^シ盡^ル 楠子誠忠萬古傳

嗚呼是れ橘の花の香の世々に絶せぬ記に
 てなきあと迄も諸人の「袖にかほりは残

りけり」嗚呼是れ橘の花の香の世々に絶

せぬしるしにて無き跡までも諸人の袖に

香りは残りけり袖に香りは残りけり

(新)月 花

月と花とは昔より誰たのしまぬ人やある
 「誰喜ばぬ人やある」さは去りながら月

花も心につれて憂ことの種となれるも多

からん足柄山の松風に吹あはせたる笙の

音も是より遠く奥州へ軍といへば身の末

は死ぬか生けるか白河の關をば雲やへだ

つらん勿來の關の春の暮駒を止めて眺
 れば都の空は花曇鎧の袖に散りかゝる櫻
 の雪は將軍の「鬢の霜より尙白し」戟の
 枕に夜は慣れて秋の哀は知らざれど越山
 の月のいと白く雲間を渡る雁かねも古郷
 の空に歸るぞと「思へば我もなつかしや
 花の都は荒はて、何處か我が身の置處今
 宵一夜の宿頼む櫻の露に袖ぬれて滅亡
 時に極りて平家の末こそ悲しけれ佞人ば
 らの讒により諫の言葉容れられず二人
 ともなき賢臣は筑紫の浦のわびすまひ御
 衣を拜して泪なる心の底はいかならむ我
 君今は賊の爲遠き島路に行給ふ無念の心
 やるせなく」十字をしるす櫻の木我が赤
 心を申さんになどか他言を要すべき月の
 光や花の香や幾萬年を経とても更に變は

あらざるに常なきものは世の治亂月を見
 て酔ひ花を見て眠れる春の手枕の「只一
 場の夢の間に移る興廢存亡の世のなりゆ
 きぞ無常なる若も世運の拙くて上には君
 を煩し下には民に苦勞させ國の亂る其の
 時は月の光は輝くも花の色香はにほふと
 もなど樂のあるべきとされば世間の諸人
 よ真心引起し國の光を東海の月よりも
 尙輝し國の譽を美吉野の花よりも尙芳ば
 しく「するこそ今の勤なれ」誓て斯もな
 せしのち月見をこそ樂しけれ」花見をこ
 そ樂けれ

(新) 湊 河

金剛山は今にあり湊河原は今にあり正成
 公は今はなし然はあれど其山は「崩るゝ
 事も有ぬべし」昨日の淵は今日の瀬と港

の川は變るべし變らぬ者は人の名ぞ建武
 の昔正成は肌の守りを取出し名も櫻井の
 香ばしき教を其子正行に返すくも傳へ
 にき之は一年都攻めの有りし時下し給ひ
 し繪旨なり是を汝に與ふなり我れ兎に角
 に成ならば世は尊氏の世となりて叡慮を
 惱し奉らんは鏡に懸て見る如しさは去
 ながら正行よ父が子ならば流石にも忠義
 の道は兼て知る弓張月の影暗く家名を汚
 すこと勿れ打洩されし郎黨を憐み扶持し
 隱家の吉野の山の奥深く月の桂もさいな
 みや流れも清き菊水の旗も再ひ翻し敵を
 千里に追ひ退けて叡慮を安し奉れ叡慮を
 安し奉れよと一言半句も私なし事に及ば
 す公の事を細々言ひ置て手兵七百率ひつ
 つ港川にぞ馳せ向ふ此時敵の陸軍は五十

萬とぞ聞えたる其大將直義といひて不直
 非義の人兄尊氏は水軍の頭となりて進め
 來る和田の岬は義貞が三萬餘騎にて防ぎ
 しも敵は見るく岬迄乗り上たれば我兵
 は前後に受し敵とて弟正季疾く來れ茲ぞ
 命の捨て所目指す直義引提へ迷途の旅の
 供させん進めくと諸共に七度遭て又離
 れ獅子奮迅に狂ひしも惡運強き直義を取
 逃したる其跡は七十三騎残るのみ身は
 十一の創口に唐紅の真心は國の爲なり正
 季よ死しての後に何か爲せん正季流石答
 へけり吾は七度生かはり賊の奴原取殺し
 叡慮を安し奉らんさなりくと正成も最
 と笑まし氣に肌拔て刺違ひて朝露と果敢
 なく消えし四十三盛りの花ぞ散りにける
 氣を勵まされ一族の十六人と五十有余の

從士の人々悉く死出の旅路を供々に手に
手を採し大丈夫の「譽れ高きに比ぶれば
金剛山は高くとも港川は清くともなど菊
水に及ぶべきなど菊水に及ぶべき

(新)王政復古

王政復古の當時を思へば過ぎし慶應の三
年の冬の十二月九日の日を初にて「都の
空に立歸る」春の光もかきくらす」消
のたちまちに世は荊蕀と亂れつゝ山郭公
鳴ころの五月やみにはあらねともあやめ
も分かぬ墨染の鞍馬の山の山びこに響き
動よめる大砲の音はさながら百雷の一時
に落る心地して驚き騒ぎ叫び老若男女逃
げまよふ都の中はさながらに鼎の沸くに
異ならず山ゆかば草むす骸海ゆかばみ
づく屍と言建て、身をかためたるつはも

の、鎧の袖に輝くや星の位も三台の影薄
れゆくさしぐしの曉やみに打出す火矢の
煙に吳竹のふしみも見えす白鳥の鳥羽も
別れぬ打しもあれ空に輝く月と日の錦の
御旗九重の大内山の山風に翻りつゝ「公
家御門押し開かせて出給ふ」大將軍の仁
和寺の宮官の威風にあたりては靡かね草
木もあらじとてふりかへり見る大丈夫が
勇氣もひごろに百倍し軍よばひも鳴神の
轟き渡る修羅の道切りつ斬られつ門毘叫
喚宮に従ふ參謀の其面々は東久世烏丸を
初として矢守高崎中沼等四條五條は旗奉
行前後左右を打守り其外勤王諸藩の銳兵
が火花を散らす一戦は國の安危とかたづ
飲む帷幕の中に置く霜の紅葉のくれない
の「丹さ心をとりに」倒れ金なる屍

は敵か味方が彼は誰れ時踏みしだき行く
 戦場の習ひ常なき露の身とかざす劍の柄
 の間も君を忘れぬ武士の道のはてこそ憐
 なれ天地も動く震動に「焰逆卷き淀の
 城見るく灰となりはて」空を掩ひし
 黒煙り跡形もなくも消えうせて朝日のひ
 かりあらはれぬ七百年の昔より武門に落
 ちし政權を治め給ひて檀原の聖の御代の
 古に復し給ひて大御代の長閑き春によろ
 こびの眉も開けて打ちつどひ昔語りと過
 ぎし世を談りつゝ「酌む盞に老いたる影
 もかつ見ゆる」此の宴をこ目出度けれ
 此の宴をこ目出度けれ

新編 薩摩琵琶歌第二集終

明治三十九年十月廿日印刷

明治三十九年十月四日發行

編輯者 寺尾 彭

東京日本橋區蠣殻町二丁目一番地
 發行者 中島萬吉

東京日本橋區藥研堀町三十三番地
 印刷者 仁科 衛

同 所

印刷所 厚信 舍

不許複製

東京日本橋區蠣殻町二丁目一番地

發行所 自省堂

自省堂最近發行書目錄

高等女學校教諭前田とみ子著

●裁縫新教科書上下 定價金八拾五錢 郵税金拾錢

日本女子大學教諭赤堀峰吉著

●和_洋家庭料理法 定價金六拾錢 郵税金八錢

高等女學校教諭前田とみ子著

●家庭裁縫新書 定價金七拾錢 郵税金拾錢

大日本海事調査會編纂

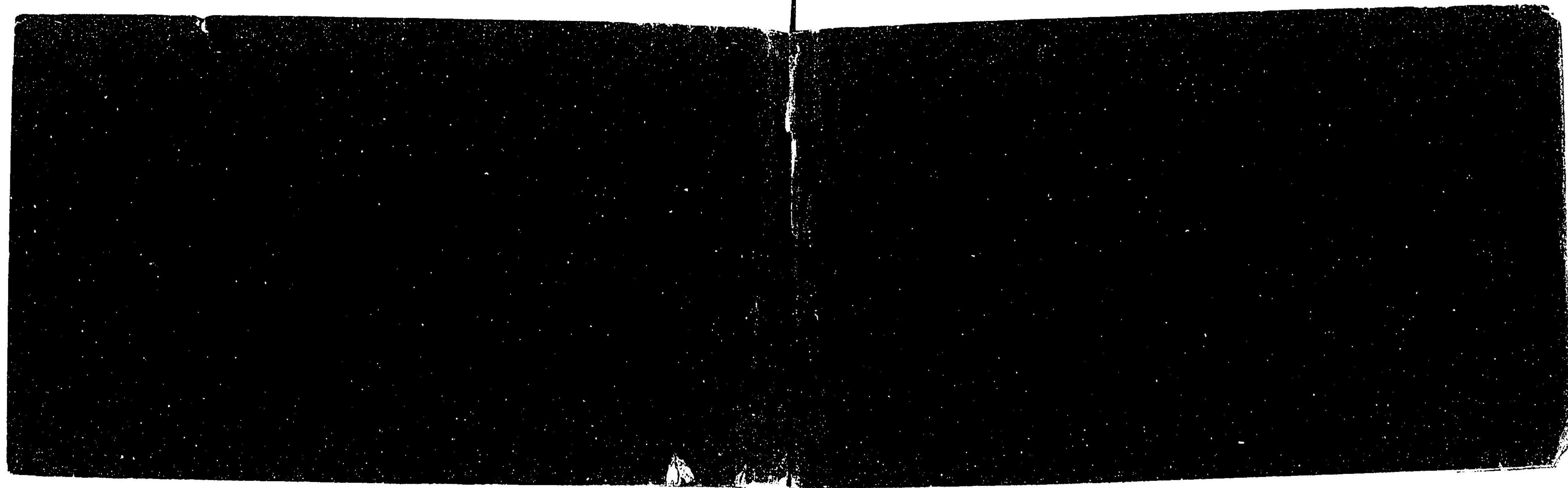
●日_本海軍須知 定價金四拾五錢 郵税金六錢

鈴木米次郎著

●音樂_{全書}樂典大意 定價金四拾五錢 郵税金八錢

鈴木米次郎著

●音樂_{全書}風琴新教科書 定價金五拾錢 郵税金八錢





074671-000-3

特66-332

新撰薩摩琵琶歌

寺尾 彰/著

M39

CEJ-0184

